國語讀本

改訂版

巻三

375.9
U84
資料室

41486

教科書文庫

4
810
41-1929
Z000301682

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

國語讀本 卷三

昭和改訂版

文學博士 上田萬年
榮田猛猪 共
鹽野新次郎 編

資料室
37519
Ue4

國語讀本　卷三

目次

前篇

一　お早う　坪野平太郎　一

運不運　下田次郎　六

二　忠君愛國　芳賀矢一　七

和歌三首　一四

三　勿來關　熊田葦城　一四

四　潮の岬　杉村楚人冠　一七

五　競漕　久米正雄　三

廣島大學圖書之印

廣島大學教書

41904

六　史傳を讀むべし（書簡文）　大町桂月　二六
七　五郎時致　森鷗外　三三
八　父　里見弴　四四
九　三都の印象　鶴見祐輔　五一
一〇　人口登錄　佐々木指月　六〇
和歌三首　六七
一一　果物　横山健堂　六八
柿の禮狀　正岡子規　七三
一二　歸鄉（詩）　尾崎喜八　七三
一三　詩的農園　菊池幽芳　七七

一四　夏を愛す　若山牧水　八三
一五　九十九里　德富蘆花　八八
文章の山　八波則吉　九五
一六　文章の道　島崎藤村　九七
一七　峠の茶屋　夏目漱石　一〇四
熟語の讀方　一一〇
一八　大震災記　（關東大震記）　一一一
一九　感謝　三宅周太郎　一一七
二〇　ボーイ、スカウト　三島章道　一二四
二一　おみおつけ　山本有三　一三三

三 歸り行く勞働者（詩）　百田宗治　一四二
三 死して惜まるゝ人となれ　嘉納治五郎　一四五
諺語三則　一五一

後篇

東西遊記抄
東西遊記に就いて　一
一 熊突　三
二 親不知　五
三 藤樹先生　九
四 求麻川　一九
五 吹上の濱　二四
常山紀談抄
常山紀談に就いて　二七
一 太田持資歌道に志す事　二八
二 桶狹間合戰　三〇
三 明智秀俊湖水を渡す事　三三
四 竹中重治の事　三四
五 立花道雪行狀の事　三五
六 關白鶴が岡參詣の事　三八
七 蒲生氏郷鐙を細川忠興に贈らるゝ事　三九

——（筆宗芳齋弦一）入討の弟兄我曾——

目次

八　曾呂利新左衞門屢、頓智の事　四〇
九　三木牛之介鍬形の詩歌の事　四四
一〇　直江兼續が事　四五
一一　加藤清正治亂を論ぜられし事　四七
一二　細川幽齋忠興を諫められし事　四七
一三　小櫃與五右衞門諷諫の事　四八
一四　武邊は律義者にありといふ事　五〇

廣島文理大學圖書之印

國語讀本 卷三

前篇

一 お早う

坪野平太郎

長い一生を無病・息災で暮さうとするには、短い一日を無病・息災で暮す方法を立てねばならない。さうして一日の運命は朝床を出る時の心持次第で定まるものであるから、床を離れる時、さあ、これが自分の立

坪野平太郎

坪野平太郎、前東京高等商業學校長。大正十四年歿、年六十七、

挨拶

身出世の首途であると觀念して、旭日昇天のやうな精神で、勢よく起きねばならない。

かうして床を出て人に出會つたら、家族はいふまでもなく、朋輩であらうが、或は下女・下男であらうが、まづ自分から極めて晴やかな愉快な感情を相手に與へることが肝要である。下女や下男に向つて、自分から先に挨拶をするのは不見識であるといふやうな卑劣な根性ではいけない。自分から先に聲を掛ければ、先方は機嫌よくにこ〳〵と挨拶するに極つてゐる。もし今更事新しく「お早う」と挨拶するのは極りが悪いと思つたら、その前夜に挨拶の豫告をしておくがよい。さうして翌朝にこ〳〵と「お早う」と挨拶すれ

撲撲

ば、皆が噴き出して笑ふに違ない。

かうなると、早朝から陽氣が家一杯に溢れるわけで、その影響は自分にも他人にも將又事業の上にも、どれだけの利益を及ぼすか知れない。早朝からぶつ〳〵小言を並べたり、澁面を作つたりするやうでは、その人のその日の吉凶は豫め判斷することが出來る。これを相撲に譬へると、所謂立合負であつて、取組まない前から、既に勝負がわかつてゐるのである。

英國の諺に、「快活の心は終まで行くが、悲哀の心は一哩で疲れる。」といふのがある。洵に名言であつて、不元氣な根性では、どても物事が甘く行くはずがない。朝から氣の晴や

かな人であつてこそ、始めて事業に成功するのである。

予の知つてゐる學生に極めて陰氣な男があつた。二箇年も一つ處に居住してゐながら、隣家の人にたゞの一度の挨拶すらしたことがない。まるで闇から牛を牽出したやうな顔付で、ろく〳〵物もいはない變人であつた。予はこれを氣の毒に思つて、或日前に述べた「お早う」の祕訣を授けたところ、その効驗は忽ち現れて、打つて變つて快活な男になつた。

祕(秘)

道元禪師　承陽大師、我が國曹洞禪宗の祖、越前國永平寺の開山。建長五年(約六七〇年前)寂、年五十三。

道元禪師は「人は喜心・老心・大心の三心を心掛けねばならない。」といつた。喜心とはいふまでもなく晴やかな快活な心で、老心とは俗にいふまめやかな心で、大心とは所謂天空

欽

衣を千仞の云々　文選、左思の詩の句。

名將言行錄　岡谷繁實著、前田利家　尾張國の人、加賀金澤藩主の始祖、慶長四年(約三〇年前)歿、年六十二。

海闊の氣象で、また「衣を千仞の岡に振ひ、足を萬里の流に濯ふ。」といふやうな心事である。

また名將言行錄に、前田利家公が「人は常に富士山を見るやうな心持でありたいものだ。」といつたとあるが、これもまた大心の態度を表白したもので、八面玲瓏として東海の天に懸る富士山の光景を見ては、何人もその心が自ら莊嚴・雄大とならずにはゐられないのである。

要するに、人は毎朝必ず快活に床を出て、上に述べた三心を以て、終日その業のために活動したならば、心は常に穩健・和平で、よく周圍の欽慕と推重とを受け、百事意のまゝにならないことはなからう。(快馬一鞭)

人の一生には時に運不運あるを免れず。不運なりとて泣きゐても、運の神は氣の毒がりもせず、笑ひたりとて稅のかゝるものにあらねば、成るべくは笑つて暮したきものなり。

何不自由なく暮して、他人より羨まるゝ筈の身にありながら、何時も苦蟲を嚙みつぶしたる如き顏付をなせる人あり。何が氣に入らぬかと聞けば、人の笑ふが氣に入らぬとか。さらば己も笑へばよきに、さて〳〵損なる人かな。これに反して、何時出あひても富籤に當れるが如き顏付をなせる人あり。本人は勿論、此方までも氣分よく、御酒をあげて祭らずとも、本人卽ち福の神なり。他人に金品を惠むばかりが慈善にあらず。愉快なる顏して、向うの人まで愉快にするは、これまた大なる慈悲にあらずや。（運不運――下田次郎）

下田次郎　東京の人、東京文學博士、東京女子高等師範學校教授。

芳賀矢一　福井縣の人、文學博士、昭和二年歿、年六十一。

シーボルト　ドイツに生れ和蘭に歸化せし人、日本に來ること前後二回。

笑ふ門には福來る。
怒れる拳笑顏にあたらず。

二　忠君愛國

芳賀矢一

余がドイツ留學中、或年の天長節の祝宴に、日本の近世史に關係あり、日本の勳章を佩びて居る男爵シーボルト氏の演說を聽いて、その中の一節に感じた事がある。同氏の言は、「西洋各國の革命は、國王に對する不滿から起つて、その結果はいつも、王室が、權威

を縮小し、或は全く顚覆するものであるが、日本のはこれに反して、政變毎に皇室の稜威を益し、繁榮を增進する。」といふ意味であつた。　これは、如何にもよく、わが國體の萬國に異つたことを言明したものといはねばならぬ。

大化改新　孝德天皇の大化二年に、氏族分權の制を改めて朝廷集權の制度とせられしこと。

明治維新　明治天皇の明治元年、政權を皇室に復し給へり。

かの大化改新といひ、明治維新といふ、政治上の二大變動は、わが國なればこそ極めて容易に成就して、「雨降つて地かたまる。」といふ結果が得られたのである。　新しい文化に接して、これを採用する必要の生じた時、制度改正の詔勅が一たび煥發すれば、祖先以來の領土領民も差出し、既得將來の權も、悉く打棄てて、唯々諾々として大命を承るといふことは、決して外國人にはあり得べからざる事實である。　これであればこそ、わが國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進歩に伴つて、進歩したのである。　かういふ場合には、外國では必ず國王と人民との衝突を免れぬ。　一旦人民と衝突すれば、國王が散々な目に遭はせられた例は、枚擧に遑が無い。　國外へ出奔する位は愚なこと、遂には刑場に引き出され、斷頭臺上の露と消えるといふ、英國・佛國の歷史などは、日本人の目からは、殆ど信ぜられぬ沙汰であつて、小學から中學にはひつて、始めて外國の歷史を學ぶものは、何人も必ず外國史に、慘酷無道の事が多いのに驚くに相違ない。

衝突

天之命　易の革の卦の辭。

元來革命といふ語は、「天之命革而四時成」といふ語から出たので、支那人は、昔から、天子は天の命を受けて百姓を治め

るものだといふ思想を根本として居る。それ故、聖人賢者たる以上は、誰れが代つて天子になつても構はぬのである。これが爲に、歷代二十五朝、長い朝廷でも三百年とは續かぬ。その時には、天の命が革つたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴いてゐる。かういふ國々には、決して大化の改新や、明治の維新のやうな改革が行はれる筈はない。イギリスの貴族は、今でも大きな領地をもつて居る、ドイツのもさうである。日本國民の、皇室に對する考は、古今東西全く類例が無いのである。

二十五朝　夏、殷、周、東周、秦、漢、蜀漢、晉、東晉、宋、齊、梁、陳、隋、唐、後梁、後唐、後晉、後漢、後周、宋、南宋、元、明。

改攻

和氣清麿

西洋諸國の帝王も、支那の天子も、國民の間から起つて、もしくは權力を以て、もしくは輿望によつて、遂に帝王の位を贏ち得たのである。素性を洗ひ、祖先を正せば、同等の國民である。是が、諸外國民の、王室に對する考であらう。日本人は、皇室をばわれ〳〵國民とは一種別なものと見て居る。支那には、「王侯將相寧有種」といふ語があるが、日本人は、帝王といふ位は、國民の決して覬覦すべきものでないと、誰れも教へはしないが、祖先以來さう考へて居る。長い歷史の中には、皇家に弓を挽いた者も無いではないが、天子の位をねらふやうな考は決して無い。大日本史には、源義朝や源義仲が、叛臣傳に入れてある。これは天子に向つて敵對した

輿輿輿

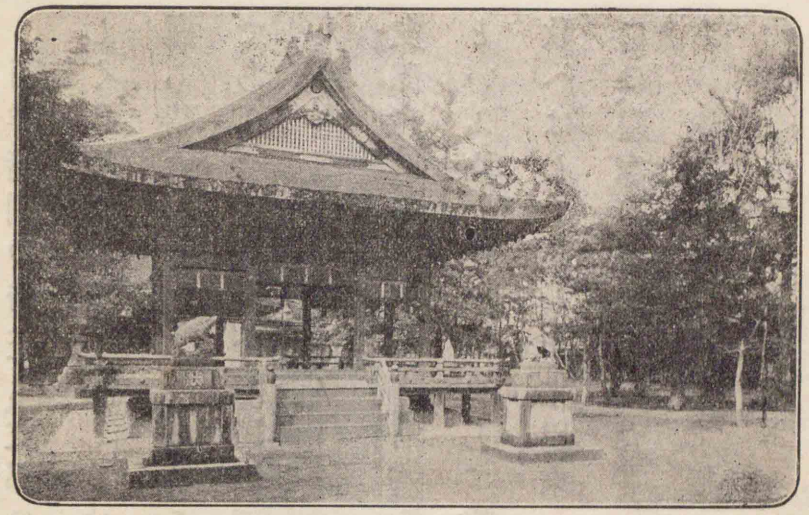
王侯將相　秦の陳涉の語。

大日本史　三百九十七卷。神武天皇より後小松天皇までの歷史、德川光圀の編纂。

源義朝　永暦元年（約七七〇年前）歿、年三十八。

源義仲　木曾義仲、元暦元年（約七四〇年前）歿、年三十一。

平將門　天慶三年（約九九〇年前）誅せらる。



護王神社

事の、大義名分を正したので、これ等の人は、別に深い考のあつた謀叛人では無い。いづれも、皇室の寵を失つた悔しまぎれに手向した亂暴人に過ぎぬ。多くは朝廷の或官位を得たいと思ひながら、それが得られぬ爲に、騷動を起して、我儘を通さうといふ輩で、叛臣と雖も、朝廷の尊さを忘れぬものである。平將門も、檢非違使になれなかつた爲に謀叛したのである。唯、一人、弓削道鏡といふ坊主が、佛法、王法を一つにして、自分がその位に坐らうといふ不屈な了簡を起したが、忠誠な臣民の聲は八幡の神託となつて、忽ちこれを排斥した。その外には、一人も無い。藤原氏が、廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ皇子を、皇位に卽かせたいといふ慾望で、これが卽ち人間としての最大慾望であつた。その慾望さへ達すれば、

弓削道鏡　寶龜三年（約一一五〇年前）歿。

廢

この世をば　藤原道長の作。道長は世に御堂關白と稱す。その女三帝一院の配となる。萬壽四年（約九〇年前）歿、年六十二。

この世をばわが世とぞおもふ望月の
かけたることもなしとおもへば

といつて、大滿足したのである。（國民性十論）

○すべらぎは現つ神なりあきつしま
　動くべき世のあらんと思ふな　（香川景樹）

數ならぬ身にはあれども願はくは
　錦のはたのもとに死にてん　（平野國臣）

いくそたびかき濁しても澄みかへる
　水や御國のすがたなるらん　（八田知紀）

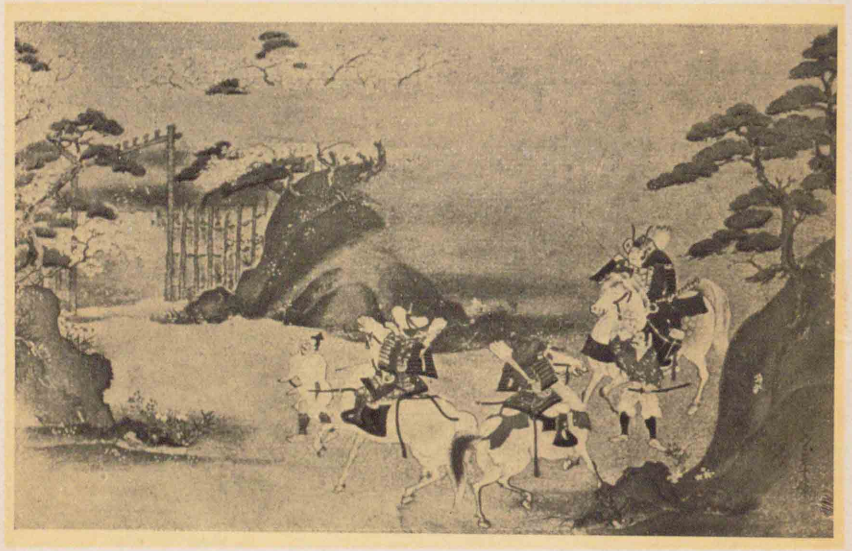
三　勿來關　熊田葦城

熊田葦城　名は宗次郎、廣島縣の人、新聞記者。

源義家　八幡太郎、頼義の子、義光の兄、天仁元年（約八二〇年前）歿、年六十八。

源義家、出羽を治むること十年、國内靜平にして民心悅服す。乃ち留守を置きて京都に還らんとす。

春風長閑に渡りて、一路の芳草、馬蹄輕し。客心悠々、また



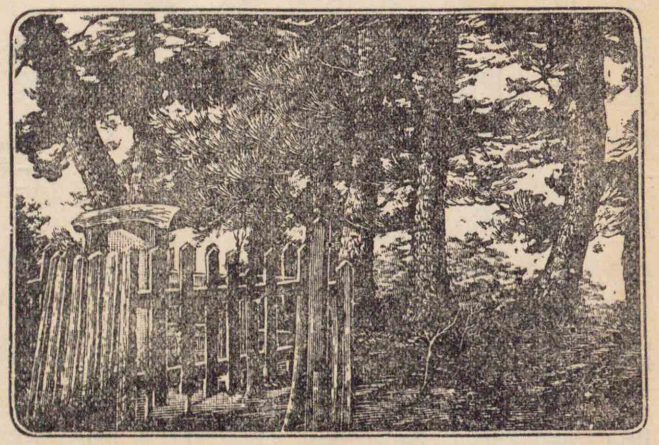
——勿來關（久隅守景筆）——

勿來の關

もと常陸の北境にあり。今鐵道東北本線關本驛の附近にその址あり。

偬（偬）

戰時の秋（トキ）に似ず。行きくて勿來の關にさしかゝる。山上、模糊として白きは雲か。地上、繽紛として飜るは雪か。雲と見えしは梢の花、雪と思へるは散り來る櫻。關山春深きところ、心なき身も、感などか起らざらん。兵馬倥偬の間にありては、月を見れども樂しからず、鳥を聞けども嬉しからず。今や干戈既に戢まりて、襟懷特に安し。將軍駒を樹下に駐めて顧望すれば、冑も花、鎧も花、身



勿來關址

はいつしか畫中の人となる。

逸興頓に湧きて、詩情自ら動く。

吹く風をなこその關と思へども、
道もせに散る山ざくらかな。

一かへり二かへり口吟みつゝ、永き日の暮れなんとするを
も知らず。

かくて長亭・短驛、日數を重ねて京に着す。百戰功を重ね
て、一門光を添ふ。來りて賀を述ぶるもの、門前市を成す。
武人は武を談じ、歌人は歌を談ず。一貴人義家に向ひて語
る、「陸奥は名所多き國と聞く。年久しくかの地に在りつれ
ば、皆それ〳〵に見候ひなん。これのみこそ羨しき心地す

涌（湧）

一貴人　關白藤原頼通。

れ。」と。義家畏まりつゝ答ふ、「心長閑けく候はんには、ゆかし
きことも候べけれど、軍に暇なき身には、優しき詠とても候
はず。唯勿來の關と申す所にて、花の散るさまの餘りに興
深く、あはれ心あらん人に見せまほしく覺え候ひしかば、其
の儘にうち過ぎなんも口惜しく、をこの口吟に任せて斯く
なん。」とて、かの「吹く風」の歌を打誦ずれば、「げにも秀歌をこそ
致しつれ。」とて、感嘆特に淺からず。花は櫻木、人は武士。斯
の人斯の花を詠じて、花と人と千古に香し。（日本史蹟）

歎・嘆

杉村楚人冠　和歌山縣の人、名は廣太郎、新聞記者、

潮の岬　紀伊國最南端の岬。

四　潮の岬

杉村楚人冠

とかくして潮の岬の端へ出た。なだらかな高低のつい

繫繫

た一面の芝生が、見る目遙かに打續いて、其の間に蔦・蒲公英が咲いてゐる。背の低い磯馴松がぽつり〳〵と處々に立つて居て、それに繫いだ牛の姿が如何にも春めかしい。村の少女子が此の芝生で鬼事でもするのか、陽氣な笑聲が遠くから聞える。右の方には、燈臺の白い壁が巍然として中空に聳え、左には無線電信局と海軍の望樓とが、さながら崖から落ちかゝるやうな處に立つてゐる。崖の下はと見ると、幾千年の波に洗はれて、山骨あらはになつた巖が幾重となく並んで、之に太平洋の大波がどう〳〵と、寄せては返し、寄せては返してゐる。

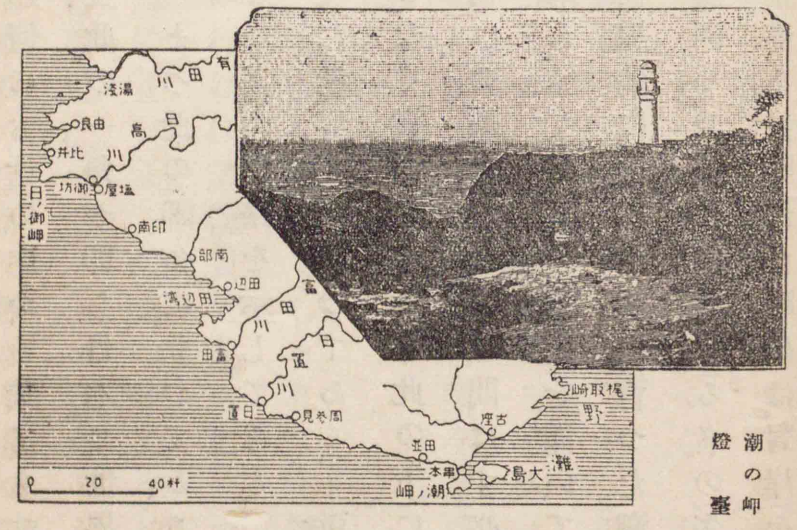
僕等は今日本の本土の最南端の一角に立つた。打開け

渺（森）

ニューギニア　又パプアともいふ。濠洲の北方にある大島。

カリフオルニヤ　合衆國の一州、大平洋岸。

ロスアンゼルス　桑港の南にあるカリフオルニヤ州の市街。



た太平洋の海面、煙波縹渺として、其の果を何處とも覺えぬ。地圖を按ずるに、此處から正南は恰も蘭領印度のニューギニアを隔てて、濠太刺利の大陸に相對し、東は遙かに太平洋の千波萬波を越えて、北亞米利加はカリフォルニヤ州のロスアンジェルスまで間を遮る物もない。日本の南端の一角といふと、

角（角）

隣（鄰）

如何にも世の中から棄てられた處のやうに聞えるが、其の實此の一角が即ち日本と世界との接觸する處である。

まづ此の岬角に立つてゐる白色不動の燈臺は、世界の船舶に其の針路を示してゐる。此處の無線電信局は、日々夜夜に世界と相語つてゐる。更に海軍の望樓に至つては、夜となく晝となく、苟も此の下に船の影さへ見えたなら、内外何れの國の船たるを問はず、必ず其の名を問ひ、其の行先を尋ね、さては其の用向を聞いて、傳ふべき處に傳へる。かう世界的に出來た處に育つた潮の岬の人々とて、其の中から濠洲や、米國に出稼する者の多く出て來たのも無理はない。荒海を見馴れた眼には、對岸を隣國と心得てゐるかも知れ

四月廿二日　明治四十二年

ケント州　英國東南端の一州。

ぬ。潮の岬の民は、小さいながらも世界的の民だと思つて、ふと自分の事に氣がつくと、今日四月の廿二日。去年は愈、紐育の見物を終つて、明日太西洋に乘出さうとした日。一昨年はちやうど今頃、巴里から倫敦へ向ふ途中、海峽を過ぎてケント州の櫻・桃・杏・梨、今を盛と咲亂れた中を走つてゐた頃である。

折しも望樓でしきりに信號旗が揚がる。それと急ぎ見に行けば、望樓長は芝生に立てた望遠鏡の下に坐つて、信號旗を上げよ下げよと忙しげに指揮してゐる。隣の無線電信局では、ばち〳〵とけたゝましい音を立てて電信をかけてゐる。今まで靜まり返つてゐた此の日本の最南端の一

角は、俄かに色めき立つて見えた。

沖には通報艦の淀が行く。　（へちまのかは）

沖（冲）

五　競漕

久米正雄

長野縣の人、小說家。

競漕の日は來た。空は朝から美しく晴れあがつた。學校の學務室から小使が朝早くやつて來て、合宿所の前に樺色の大きな旗を立てた。それがいかにも晴れがましく見えた。

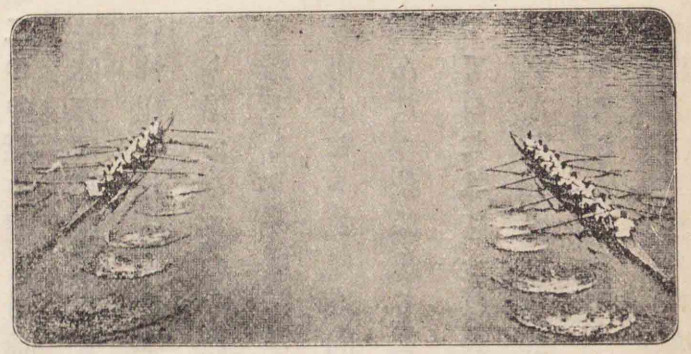
午後になると晴れたまゝに風が吹いて來て、應援船の旗をはたはたと鳴らした。コースには可なり荒い波が立つた。愈、競漕が始らうといふ頃になつたら、珍しい夕凪が來た。

コース Course.

選手は皆樺色のユニフォームを着た。土手では觀衆が一種の尊敬と好奇の念を持つて、此の樺色の衣服を着た選手達に道をあ

ユニフォーム Uniform.

凪風



競漕

けた。

味方の短艇がまづ拍手に送られて臺船を離れた。二十本ほど漕いで、審判艇の差出す綱に繫留した。續いて紫の敵艇も繫がれた。

艇庫と土手と應援船から「樺あ。」「紫い。」などといふ聲が錯綜して起つた。審判艇は二つの艇を曳いて發足點へ向つた。

艇は發足點の赤い浮標に着いた。水路を見渡すと、風は全く凪いでゐるのではなかつた。それは絶えず東北から吹いて來た。私は氣が氣でなかつた。其の中に「用意」の命が下つた。艇首は又一瞬間强風に曲げられた。「えゝ儘よ。」も

て、艇首を左へ曲げた。

うなるやうになれ。」と眼を瞑つた。號砲が鳴り渡つた。用意と號砲の間がほんの一瞬間であつたのに、ひどく長いやうに思はれた。二つの艇の櫂は同時に水に入つた。

味方の艇はどうも滑り出しがよくなかつた。「こいつはいけない、皆慌てたな。」と思つた。敵艇を見ると、確かに一二シートは此方より出てゐるらしい。「ゆつくり。」と整調が叫んだ。私は更に大きな聲で、もう一度其の言葉を全艇に傳へた。皆の調子がやつと合ひ出した。此の時向うの紫の舵手が「敵艇を拔くこと約半艇身。」と叫んだ。私は忽ち其の後を受けて、「嘘だぞ。」と怒鳴つた。今まで默つてゐた私は、一度其の言葉をいつて了ふと、急に口の緊りが解けたやうな氣がして、恐ろしく雄辯になつた。其の中に紫の三番が一つ大きなスプラッシュをして、水煙が鮮かにぱつと騰つた。機を得たと言はぬばかりに、私は、「やつたぞ、あんな大きなスプラッシュを。」と叫んだ。それを見た者、見ぬ者も皆其の言葉に元氣づいた。敵の艇は沈默してしまつて、間もなく二つの艇は並んだ。そして水門前で、味方は約半艇身先んじてゐた。紫の舵手はそれでも「向うはもうへたばつたぞ。」などといつた。私も「なあに、此方が出てゐるぞ。」と應酬した。

櫂
シート Seat.
スプラッシュ Splash.

水門まで來かゝると、私は「さあ水門だ。」と敵に先んじて叫んだ。いかなる舵手でもいふにきまつてゐる場所の指示を、敵艇の機先を制していふのも、一つの戰術であつた。早くいつた方が、晩くいつた艇より先に其の場所に屆いた譯だからである。後れ馳せに敵は水門で特別な力漕を十本した。それで亦艇は並んでしまつた。後から追附かれると、何だかずつと追拔れたやうな氣がするものである。味方の艇は何だかいつもより船脚が遲いやうであつた。でも暫くすると、味方の艇が又じり〳〵拔きだした。私は

渡場　隅田川の竹屋の渡をいふ。
ピッチ　Pitch.
ラストヘビー　Last heavy.

「此の調子で。」と叫んだ。敵は沈默してゐた。そしてもう渡場での力漕、十本は効力がなかつた。整調は半眼で其の力漕を見やりながら、やつと安心してピッチを上げ出した。

洗場では半艇身以上先んじてゐた。併し此處での半艇身ばかりの差では、敵のラスト・ヘビーが利けば何の役にも立たない。私は「あと一分だ。もう死んでもいゝぞ。」と激勵した。此の「あと一分。」といふ練習中に用ひ馴れた言葉が、何よりも選手を元氣づけた。一分間なら、いくらへたばつても漕げる筈なのである。

皆は疲れて來た。すると不思議に艇がよく出だした。味方の艇は、疲れて來ると、各個人の癖がとれて、全體としての調子が揃ふのである。協力は此の時始めて平均した。そして整調の櫂につれて、各は器械的に身體を前後に動かした。

敵のラストも實によく出た。併しこれを見て氣遣つてゐる間に、味方の方のヘビーも非常によく利いた。多年の熟練で整調のピッチがぐん〳〵上つた。「もう十本。」決勝點に入るまでは、隨分長く感ぜられた。私はひよつとして、もうウィンニングへ入つても、審判の號砲が發火しないのぢやないかと思つた。其の瞬間に號砲は響いた。皆は漕ぎやめて、艇内に身を伏せた。私は始めて此の時嵐のやうな喝采が水上に鳴り響いてゐるのを聞いた。これは決勝點に近づく時から盛に鳴つて居つたのであるが、私の耳には入らなかつたのである。

ウィンニング　Winning.

「ごつちが勝つたんだ。」と、二番が苦しい息の中から情ない聲を出した。

「安心し給へ。僕等だ。」と私は答へた。併し私自身も勝利を確信してゐるのではなかつた。そして審判所に掲げられた樺色の旗を見るまでは、安心がならなかつた。

喝采はまだ續いてゐた。今までに類のない程の接戰であつたのが、敵味方のいづれにも屬してゐない觀衆をさへ熱叫せしめたのである。（學生時代）

六　史傳を讀むべし

大町桂月

大町桂月
高知縣の人、名は芳衞、文章家。大正十四年歿、年五十七。

青年はいかなる書物を讀むべきかとの問に對し余見たに申し述べ候人は何人も模擬性と感染性とを有し居り候　而して一生の中この二性の最も熾なるは少年時代若しくは青年時代に候　どちらかと申せば模擬性は少年の方が強く感染性は青年の方が強く候　君子に接すれば君子に感染し小人に接すれば小人に感染し豪傑に接すれば豪傑に感染し小才子に接すれば小才子に感染するものに候　割り出さきるべからずとも存じ候

この頃の青年の一般の缺點は歷史傳記の智識に乏しき事に候　從つて今の青年は聖人君子英雄豪傑志士仁人大學者大宗教家忠臣孝子などに接することを極めて少く從つて自然人物が

小くなり眼界が狹くなりて神經のみが尖り申し候　これ實に國家百年の大患に候　故に小生は大呼す「請ふ大いに史傳を讀まれよ」と

又一つ今の青年に通ずる缺點とれあり候　そは箇人的若しくは孤立的といふ點に候　即ち前代と絶緣して

たのれ一代と思ふ考があまりに強く候　從つて重厚雄大の氣風無くしてこせこせちよこちよこする小人物が多く候　これも史傳と親しまぬよりたることに候　史傳を讀めば「積善の家には餘慶あり積不善の家には餘殃あり」といふことがよく解り申すべく行が自ら重厚になり申すべく人物もどつしりして參り申すべく候

申すまでもなくいへば國家の盛衰興亡は全く人物の有無如何にこれあり候　盛なる國も人物なければ忽ち衰へ振はざる國も人物あれば忽ち振ふ　我が國將來の發展に就いても國民の人格を重厚雄大ならしむるが最大急務なりと確信致し候　人格を重厚雄大ならしむるには史傳に親

しみて偉人に感染するに若くはなし
と存じ候　聖賢の遺著は史傳を歸納
したるものに候へば史傳と共に常に
座右に置きは夕絶えず讀誦なさるべ
く候　さらば卑怯鄙吝の念次第に消
えて心が公明正大になり申すべく候
文學も古きものは精神の香たかく
人の心を淳化致し候へども近時の文
學は動もすれば人を誤るもの多けれ
ばその選擇には深き注意を要すべく
候

一學劇　時代試驗

森鷗外
名は林太郎、島根縣の人、醫學博士、文學博士。大正十一年歿、年六十三。
將軍家源頼朝。

七　五郎時致

森　鷗　外

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。
中央前景に狩野介宗茂・新開荒二郎忠氏がゐる。

第一の大名　「最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどういたいたやら。（第二の大名に）もとより曾我の殿原は奸盗山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩つきになり申した。

第二の大名　「情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆゑ、申し宥める道もござらう。御屋形の御座所近く推參いたしたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

魂魄

雜色「唯今これへ、曾我の五郎を召連れてまゐりまする。

（雜色退場。五郎登場。大見小平太實政、繩を取る。狩野、座を進む）

狩野「曾我の五郎、承れ。唯今これへ召されたは、某と新開とが承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ、逐一申し立てい。

五郎（怒る）「默れ、狩野の介。祖父伊東の次郎祐親が、將軍家と不和のため自滅に及んでから以來、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智麿の流を酌む由緒ある身分ぢや。申す程の事は、ぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら何事も申すまい。

狩野「怪しかる事ぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開「それをかれこれ申すのは、犯人の身となつても、まだ君に楯つく所存か。

賴朝の聲（簾の內より）「いや待て、狩野・新開。曾我の五郎が申す條尤もなれば、賴朝みづから聽いて遣はす。

（簾を半ば卷く。賴朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に殘る）

五郎（新開に）「そこを退いて貰はう。これより物申すに、和殿がそれにゐては、和殿に物言ふに似て快うない。

將軍「新開、退いて遣はせ。

新開「はあ。（新開退く）

將軍「見れば昨夜の雨に、そこの土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒「はあ。（卒、右手より敷革を持出で、敷く）（五郎感ず）

劇の五郎と五郎丸

五郎「有難く拜領いたす。（敷く）

將軍「然らばみづから尋ねるが、この度工藤を討取つたのは、年ごろの企か、ただしは俄の思立か。

五郎「それは申すまでもない事。我等が父を討たれたは十七年の昔。兄が五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜなんだが、兄が九つ、某が七つになつて、物心を辨へてから以來は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍「然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五度乃至十度も鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎「いかにもその往返には心をつけ、足柄・箱根・大磯・由比・小坪のあたりにたゝずみ、兄弟つけ狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎にも餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍「ふん、さもあらう。さて工藤は父の仇ゆゑ仔細ないが、多くの

忘妄

憚彈

大藤内（吉備津宮の祠官成景。）

麾下の侍をば何故妄りに傷つけた。

五郎「固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企つるからは、刃向ふものあらん限り、千萬騎をも切り靡けうと存じたが、我等の名のる聲を聞いて、足のたち所も知らず逃げゆくゆゑ、後日のために一太刀づつ印を附けたまでござる。

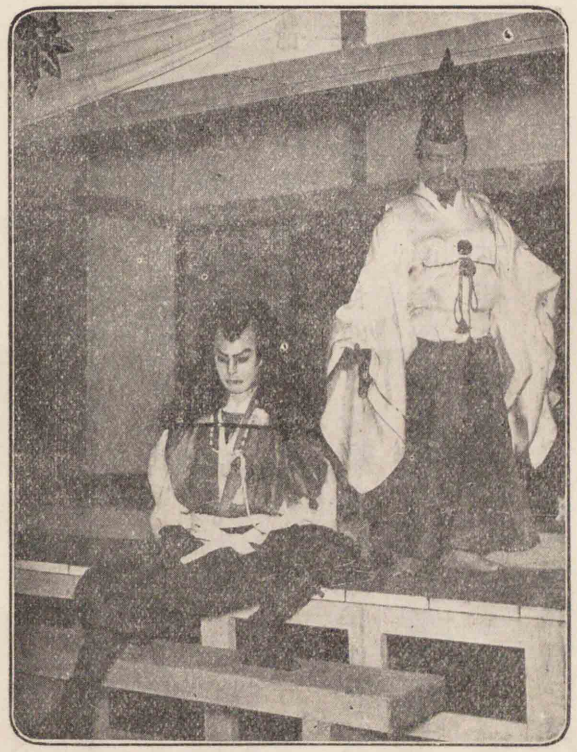
將軍「して、大藤内はなぜ討つた。

五郎「あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆゑ、切棄てはいたいたが、所領安堵を喜んで下國する途中、報謝のために引返したはせめてもの心がけ、今はなか〳〵不便に存ずる。

將軍「神妙な詞ぢや。ぢやが、それ程義理を辨へたそちが、既に敵を討つた上、なぜ予が座所に踏みこんだ。

五郎「これは憚ある申し條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の

御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが、成りゆきとは申しながら、三浦殿にあづけられて自滅いたいた。また敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これ等の遺恨なきにあらねば、一太刀おうらみ申した上で、自害いたす覺悟でござつた。



劇の頼朝と五郎

將軍「おう、よう藏さずに申したぞ。この度の企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。

仰抑柳

五郎「さやうなものは一人もござらぬ。

將軍「さは云へ、母には打明けたであらうな。

五郎「こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死に

に往けと申す親のござらうや。

將軍「おう、一族否運に陷つたそちが申し條としては、一々尤も至極

に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲（上手背後にて）「はあ。四郎忠常只今それへ。

（仁田、首桶を持ち、登場）

仁田「仰によつて曾我の十郎が首級、これに持參いたいてござる。

將軍「五郎、兄に逢はせて遣はすぞ。それいましめ解け。

（天見、五郎の繩を解く）

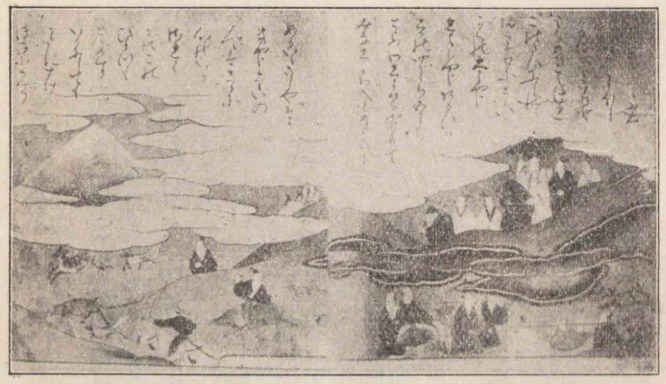
仁田「實檢の上申し請ひ、和殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ、對面

いたされい。

惜借

（首桶を開く）

五郎「懷かしや兄上。不覺を取つて縛められ、口惜しくながらへ申す。さるにても兄上、どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居合はせたら。」



（奈良繪本）

夜討曾我

仁田「いや、和殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切りまくられ、右の肘と小鬢とに薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙く、我が薙刀に拂はれて、刀はほつきと鍔元から。」

五郎「なに、兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上に佩かせなんだか。」

仁田「おう、その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆゑ、首討つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、首を我が手に授けたのぢや。」

答苦

五郎「さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛かられたか。」

（五郎歎く。犬房丸、鞭を持ち走り出づ）

犬房「父上の敵、思ひ知れ。（五郎を鞭つ）」

五郎「や、この小童は何者ぢや。（五郎睨む。犬房たじろく）」

仁田「犬房丸、御前ぢやぞ。」

五郎「なに、犬房丸が御身か……。刑場の土になるわしぢや。せめてもの心やりに、さあ、その答で打つてくれい。」

犬房「父上を討つたお前は、強い人ぢやと思うたに、優しい事を言うて下さる。それではどうも打たれませぬ。」

五郎「おう、さうか。さあ、につくい小わつぱ、打たれるなら打つて見い。」

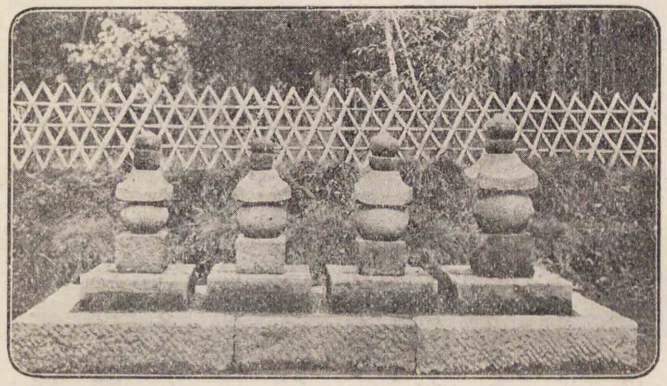
犬房「なんの打たいで。おのれが、おのれが。（連打す）

將軍「もうよい、もうよい。犬房、それで。堪忍いたせ。

犬房「はつ。（鞭を棄てて平伏す）

將軍「五郎、この上問ふべき事もないが、賴朝闔外の職を辱うして、勇士猛卒を惜しむこと何物にも譬へられぬ。どうぢや、志を翻して奉公いたしてくれまいか。

五郎「それは存じも寄らぬ事。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房にこの素首を取らせ申さう。犬房が討たいでも、近き惠に代へられぬ遠き恨のまつはれば、いつ謀叛人にならうも知れぬ。一しよに死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。（大見に）さあ、縄を打たれい。



向つて左二基曾我兄弟の墓といふ
（在神奈川縣・下曾我村城前寺）

大見「いや、某は五郎丸が掛けた儘の御身の縄を、君命によつて預り、また君命によつてほどいたばかりぢや。御身に縄打つすべを知らぬ。

將軍「待て。勇士を失ふは遺恨ながら、その志は奪ふべからず。五郎が縄は、賴朝が手づから打つて遣はさう。

五郎（居直る）「こは思ひも掛けぬ仰ぢや。今生の思出に、さあ、御縄を拜領いたさう。

將軍（起つ）「わが打つ縄は、不動の羂索、難伏のそちにはふさはしからう。いで〳〵。

（階を降らんとす。幕）

（鷗外全集）

八父

里見弴
本名山内英夫。横濱市に生る。小説家。

里見弴

里見弴

手

最近に亡父の五年祭に會した。大正五年十二月五日に父は死んだのだ。

父の外貌で、一番はつきり殘つてゐるのは、手だ。馬鹿に小さく、指が太短くて、先から數へると第三の關節、握ると銀杏になり、開くと梅干になる、あの梅干皺が、深くて美しく可愛らしかつた。老年のことで、つまめば勿論山脈のやうな一本の皺にたくし上げることの出來るものだ。うちではいつも必ず四つ折の手拭を膝にかけてゐたが、その上に、ちよつとでも汚すことが惜しさう

皺　雛

胡麻點
謠曲本に聲の高低を示す爲に文字の側に附けたる胡麻粒の形したる點。

あたり・くり
何れも謠曲の節の名。

に、鶉の卵ほどのものを掌に入れてゐるかと思はれる位の中高にして、行儀よく指先を揃へて、この皺くちやな小さな手が置かれてゐた。そして、好きな謠をうたふ時になると、右の指先全體が、胡麻點の上げ下げ、あたり、くり、いろ〳〵な符牒を描いて、うね〳〵と膝の上で動くのだ。一體元氣な人だつたけれども、爪には、年は爭はれないもので、盛に縱しぼが走つてゐた。

自分で自分の年とつたことに氣がつくのは、いつも、私は手だが、だん〳〵父のに似てくるやうな氣がしてならない。恐らく兄弟中で、今に私のが一番似るだらう。

角力

晩年の五六年はさうでもなかつたが、私が覺えてからそれまでの父といふ人は、ひどく忙しさうで、めつたに家には居なかつた。朝われ〳〵が起きる時分には、冬だと、禿頭がほんの少しばかり見

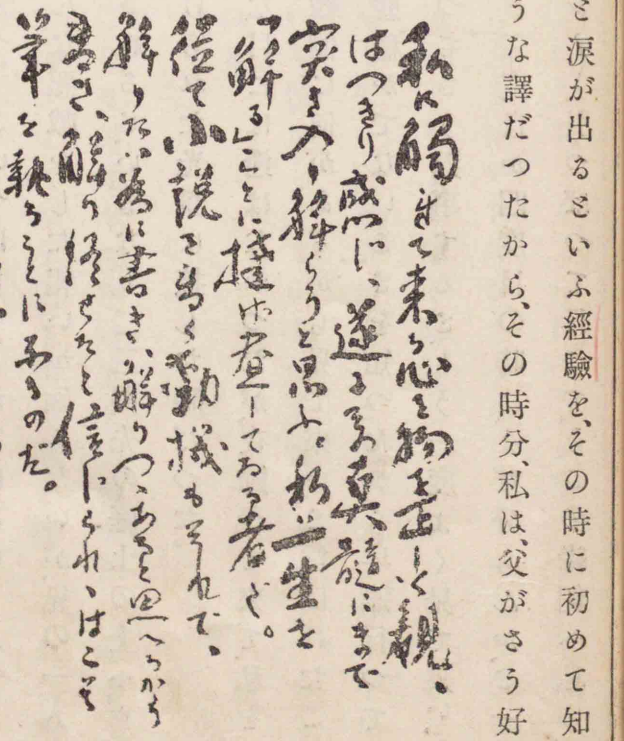
秀禿

えるか見えないほど、すつぽり夜具を被つてしまつて、グウ〳〵と可なり大きな鼾をかいて寢てゐた。それつきり、われ〳〵は學校へ行つてしまふと、夜私たちの寢る前に歸つて來ることは稀だつた。だから、三日も四日も、禿のさきだけしか見ないで過ごすことがあつた。たまに家にゐる時は、客の絶間がなかつた。絶間があると、小さな手帳に、短くなつた赤鉛筆で、クシヤ〳〵に何やら書いてゐた。

そんなわけで、私はまるで父の側へ寄つておもちやにされたり、甘やかされたり、一緒に遊んだりした覺えがない。たつた一度、六つか七つの頃、夏、鎌倉の別莊の庭で、兄弟たちが寄つて角力をとつてゐると、何と思つたのか、父が褌一つになつて飛出して來て、「さあ來い。」と構へたのだが、年の順にだん〳〵轉がされて、やがて私の番が來て、一所懸命に飛びかゝつた時の嬉しさを、今もつて忘れな

い。あんまり嬉しいと涙が出るといふ經驗を、その時に初めて知つた。前に云つたやうな譯だつたから、その時分、私は、父がさう好きだつた筈はないのだけれど、それでも何とも云へず嬉しかつたのは事實だ。

私の子供たちは、この頃そろ〳〵丁度いいおもちやになつて來て、家にさへゐれば晩飯後など、差しあげたり、振廻したり、喧嘩ごつこをしたりして相手になつてゐるが、嬉しさうには違ひないけれど、とても涙がにじみ出る程ではなささ



うだ。私のは少しづつなしくづしに嬉しがらせてゐるので、父のは、そいつを一ぺんにまとめて私に授けてくれた譯だらう。

日の丸の痕

驚いたのなんのと云つて、こいつはとてもかなはないと、ぶるぶる怖氣づいたのは、どんな惡戯をした報いか知らないが、兄の一人が、縁側へ引きずり出されると、いきなり二三間先の庭土の上へ、ウンといふ程たゝきつけられた光景に接した時だつた。

さいはひ私はそんな目には逢はなかつたが、夜歸つて來て、私を呼出して、どこそこの縁側に何かあるから見て來い、と言はれたことがある。調子で、事態穩かでないことを知つたから、早速行つて見たが、何もない。戻つてさう返事すると、もう一度よく見て來い、とどなりつけられた。三度目か四度目の時に、まだ分らんか、と一喝。立ちあがると、グン〳〵引つぱつて行つて、そこの縁側へ私の

額をこすりつけるやうにした。そこには、二三日前に、私が半紙に赤インキか何かで日の丸を描いたのが、しみぬけて、ちやんと型になつて殘つてゐた。勿論、一も二もなく降參してしまつたが、あとでは、「何かあるから見て來い。」は意地が悪いと、内心大いに不平に思つた。が、今ではそれも懷かしく、この類の記憶でもいゝから、もつと澤山ほしく思はれる。

形見

次には少々自慢話になるが、死んだ年の夏、父は輕井澤に避暑中、澤山書を書いて持つて歸つた。もう私は別に家を構へてゐた時で、ある晩なにかの集りで行くと、親類や大勢寄つてゐる席に、その紙や唐紙が並べられて、めい〳〵一枚づゝ分けて貰ふことになつた。私は「水自竹邊流來清」が字の出來がいゝと思ひながら眺めてゐると、父が側に來て、一枚別にのけてくれて、

輕井澤　長野縣北佐久郡輕井澤町。

「お前はこれにせ。」

「爾唯弗レ矜ホコラ ですか……」

それから先を私が讀みかねてゐると、

「爾唯弗レ矜ホコラ、天下莫シ與レ汝ヲシテ爭フモノヲ功。」

で生馬兄が讀んでくれた。

「いや、これア大變だ。結構ですけれど、これアどうも、語がちつと……。これア掛けられない、これア困るなア。」

私は恐縮してしまつて、わけもなく赤面しながら呟いたのだつた。が、内心では、父がそれを私のために選んでくれたことを、どんなに有難く思つたか知れない。

「なに困ることがあるもんか。」

相變らず叱り飛ばすやうな父の言葉だつた。この時にも私は涙がこぼれかゝつた。

矜　ほこる

生馬　作者の實兄有島生馬のこと。本名壬生馬、畫家、文藝家。

その後、この語に、ある時は叱られ、ある時は勵され、ある時は冷かされ、ある時はほゝ笑まされ、ある時は鞭うたれ、又ある時は他愛もなくおだてられて來たものだ。が、何にしても大分役に立つてくれた。今後も役に立つてくれるだらう。いつになつても要らなくなる時のない、先のつかへる惧れのない言葉だから。（白醉亭漫記）

九　三都の印象

鶴見祐輔

鶴見祐輔

鶴見祐輔　群馬縣の人、代議士、文章家。

フランス人は勤勉な國民である。イギリス人も勤勉な國民である。併し、其の勤勉さには相違があるやうに思はれる。勤勉それ自身に本質的の差がある譯はないけれども、英佛人の勤勉性の差は、單に外形的

特持

形式的相違だけには止まらぬやうである。それは兩國民の國民性の相違から生ずるのではあるまいか。然らば、其の國民性は如何に相違して居るだらう。こんなことを考へながら、私は一人で能くパリの公園を歩いてゐた。そして、之にアメリカを今一つ加へて、能く三國の國民性を比較して見た。

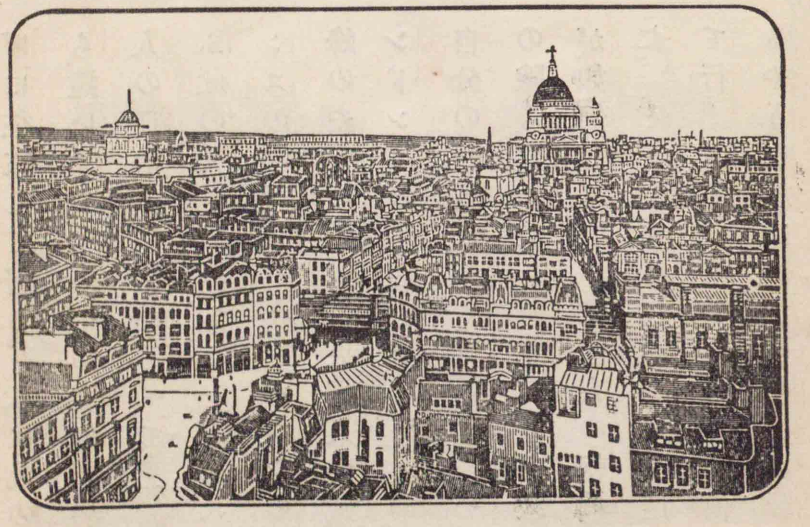
三國の特色は其の大都會に於て著しく眼につく。それは、都會は其の國の國民性を最も鮮かに映出して居るからである。人はニューヨークは餘りに歐洲化して居ると言ふが、併し、ニューヨークに一日居ると、我々はアメリカの大空氣が全身に躍動するのを意識せずには居られない。ニューヨークはやはり米國である。そして、ロンドンは英國であり、パリは佛國である、恰も東京が日本であるやうに。

話はまた英佛人の勤勉性に還る。朝早くパリの街を歩くと、石

旋施

灑(洒)

クラーク Clerk.



の鋪道の上にはもう綺麗に打水がしてある。凱旋門のあたりの廣場には、花賣の露臺が幾つともなく立並んで、新聞賣の小舍と共に、心地よい朝の活動を象徴して居る。黒い質素な着物を着た女達が、耳に快いフランス語で笑ひ興じながら、忙しげに花に水を灑いだりなどして居る。

ロンドンの下町に晝頃行くと、狹い側道の上に、商館や銀行などのクラークかと見える若者が、帽子も冠らずに、何百人となく忙し

考老

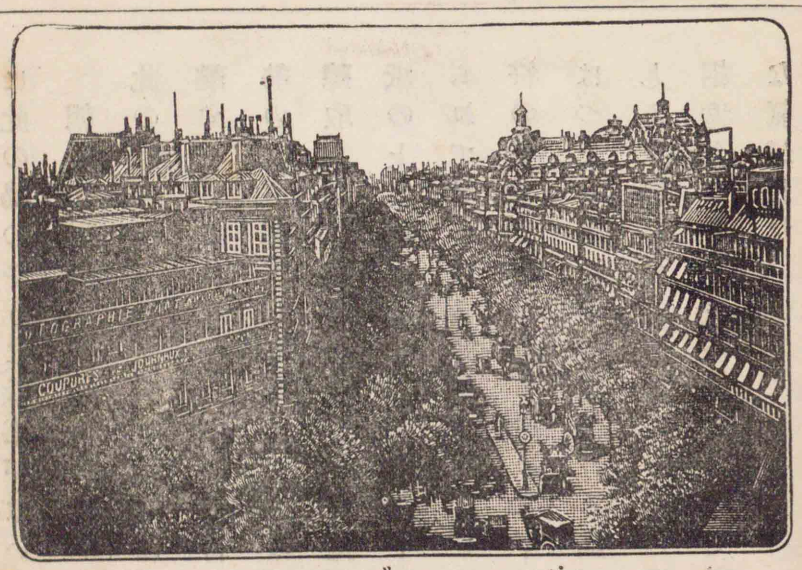
クールヴァン　フランスの女流小說家、大正四年歿。

裡（裏）

げに往來して居る。私は此の群の中を縫ふやうにして歩きながら、遠いアフリカや印度の貿易をデスク（机）の上でやつて居る此の人人の日常の生活を考へて見た。そして、フランス人とは種類の違ふ此の人々の勤勉さをも考へて見た。こんな時には、何時もフランスの小說家クールヴァンの言葉が腦裡に閃いた。「佛國人は蜜蜂のやうに勤勉に、英國人は蟻のやうに精勵である。」と。パリとロンドンとの生活を見て居る中に、此の言葉の深い意味が、日一日と自分の頭腦に深く沁みて行つた。晴渡つた初夏の日盛りに、寸刻の隙もなく、花から花へ蜜を求めて翔つて行く可憐な蜜蜂の勤勉が、如何にも能く佛國人の朝起の心持を現して居るやうに思はれた。そして、來るべき冬の支度のため、營々として重い餌を引摺つて行く健氣な蟻の精根が、如何にも能く英國人の勤勉を現して居るやうに思はれた。

拾捨

觀音堂　東京市淺草公園內の金龍山淺草寺のこと。天台宗。



それならば、米國人のあのいらいらした忙しさは何に喩へられようかと考へて見た。私の頭の中に、ふと淺草の觀音堂の鳩（バリ）が浮んで來た。何時行つて見ても、大勢の人込の中で、幾十百羽の鳩が我劣らじと押しあひへしあひ、地上の豆を拾つて居る。物音に脅かされて、飛立たうと半分氣を外に（ー）配りながら、それでも眼前の豆粒は一つでも餘計に食べようと、眼の色を變へて何時までも餌を拾つて居る。米國人の勤勉は正

叫(叫)

廻るやう
書けよう

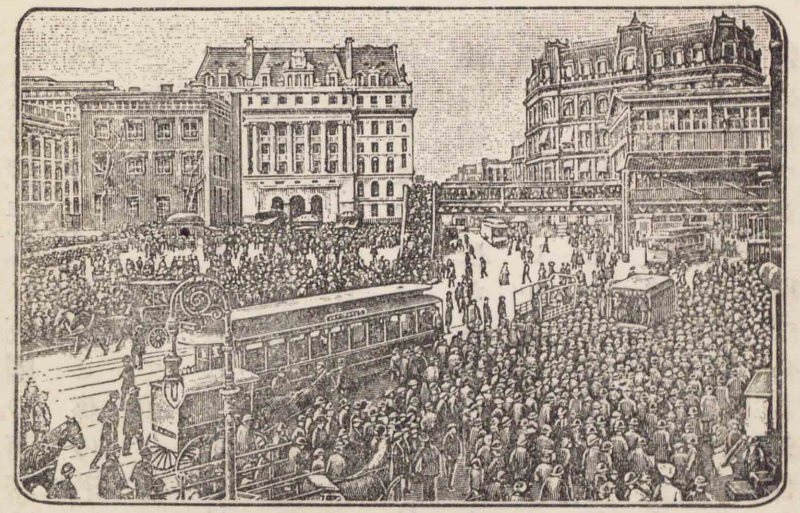
に此の鳩のやうに、餘裕がないと、私には考へられた。

朝の出勤時間頃に、ニューヨークの地下鐵道に乘る人々は、是が此の世ながらの阿鼻叫喚ではないかと思はれるやうな雜沓を目撃する。或日、私は汽車の切符を買ひに市内營業所に行つた。大勢の客が群集してゐた。係の若い米國人が、私の行先と列車とを聽取り、頓て右手の袖を一寸捲り上げて、鉛筆持つ其の手を切符の紙の上で左右に五六回激しく振つた。何をするのかと呆氣に取られて見て居ると、忽ちかつと手を紙の上に落して、すら〳〵と切符の文字を眼の廻るやうな早さで書終へた。只今手を振つたのは、つまり手に運轉を付ける爲だつた。私は噴き出すやうな可笑しさを感じた。何もさう手に運轉を付けないでも、大して時間に相違もなく字が書けようし、又運轉を付ける時間だけ無益のやうな氣がした。

堆推

其の翌年、私は英國の商務院の鐵道局に、賃金引上の一覽表を貰ひに行つた。すると、係の若い英國紳士が、「確か此の机の中に一枚だけ統計表を入れて置いた筈だ。」といつて、自分の机の抽出を開けた。私は見るともなく其の抽出の中を覗き込んで見て驚いた。まあ何といふ多數の書類だらう、累々と種々な紙片が堆積されてある。それを件の若い紳士は手を突込んでがさ〳〵と搔廻して、「此處にはない。」といつて、次の抽出、又其の次の抽出を開け、そして最後の抽出の底から、やつと賃金表を見付け出した。「此は差上げる譯に行かないから、此處で見て下さい。」といふから、「一度見ただけでは迚も覺えられませんね。」と答へると、一寸當惑して、「それでは私が寫して上げませう。」といつて、それを別の白紙に筆寫し始めた。ニューヨークならば、傍に居る若い女のタイピストに命じて、一分間内に寫させる所であるが、件の若い紳士は、先づ自分の机の上の吸

頓頑



ニューヨーク

取紙の上に原本の統計表を置いて、其の上に白紙を當てて書出した。私は一寸面喰つた形で、此の異樣な淨寫法を見てゐた。すると、彼は白紙の上に數字を一行書いた。そして、今度は其の白紙を左手で持上げて、下の原本を覗いて、次の行の數字を諳記して、又白紙を其の上にべたりと置いて、諳記しただけ書いて、又前のやうに紙を持上げて原本を覗いて、又其の上に重ねて書いた。不思議な遣り方だと見て居ると、頓て書き

功切

終へた。インキが乾いてゐない。そこで、今度は其の紙と原本と二枚持上げて、下敷になつて居る吸取紙の上に裏向に置いて、叮嚀にインキを拭取つて、さて私に其の淨書をくれた。ニューヨークから到着したばかりの私は、全く呆氣に取られて此處を出て行つた。そして、幾回となく鉛筆持つ手を振つて運轉を付けて、猛烈な勢で切符の文字を書いた米國人と較べて考へて見た。

其の春、パリの郵便局に書留小包を出しに行つた。慣れない私は、誤つて受取人の欄へ自分の住所・氏名、差出人の欄へ先方の住所・氏名を書いてゐた。之を局の小窓から差出す時、私はふと氣付いて、「おや。」といふと、局員の佛國人が、つとペンを取つて、受取人といふ字を抹消して差出人と書き、差出人といふ字を抹消して受取人と書いた。成程これで送票は完成した譯だ。而もそれがほんの一瞬間だつた。私は全く感心して了つた。そして、ニューヨークの

切符賣と、ロンドンの役人と、パリの郵便局員とを頭の中で列べて見た。―鳩と蟻と蜜蜂と。

一〇　人口登錄

佐々木指月

一千九百十八年九月、世界大戰爭の眞最中、私は北米合衆國の人口登錄を紐育で受けた。私は紐育のユニオン角園の登錄所へ行つた。當時米國は第二國民軍の動員を了へて、第三國民軍の召集をしようといふ前であつたから、街道は星條旗の虹を靡かして行進する軍隊の喇叭の音が高い建物に反響し、市民はもう熱狂してしまつてゐた。青年といへば悉く軍隊の制服を纏ひ、纏はないものは老人と婦人

佐々木指月　名は榮多、神奈川縣人。文學者にて彫刻をよくす。

ユニオン角園　マンハツタン區の中央にある小公園。

星條旗　十三州を象る十三條の線と四十八州を象る四十八個の星とより成れる合衆國の國旗。

纏（纒）

と子供と外國人だけといふほどであつた。

ユニオン角園の登錄所で、私の名が合衆國の帳簿の上に登錄されて、やがて送附さるべき地方兵事課の召集狀を待つ身になつて、私は星條旗に對して熱心に敬意を表するものとなつた。一週間ばかり立つと、地方兵事課から呼出狀が來た。出頭したのは丁度夕方であつた。

館内の廣いホールには星條旗が揭げられ、自由の女神コロンビアの繪箋は壁に貼られて、その上から電球が幾つかの燈の葩を開いてゐた。呼出された人々ははや詰めかけてゐた。黑人もゐれば、猶太人もゐた。妻を同伴した英語を解せぬ人もゐた。

帳簿

コロンビア　合衆國の守護神

宣宣

私たちは女事務員から下調べを受けて、公式の宣誓場に呼入れられるのを待つてゐた。獨身の市民は一も二もなく軍籍に入れられた。妻子のある人でも、財産のある人や、また收入のある妻を持つた人は同じく軍籍に入れられた。まだ市民になつてゐなかつた外國人でも、進んで召集に應ずる宣誓をなしたものもあつた。群集はこれに對して敬意を表した。

私の順番は廻つて來た。私は公式兵事委員の前に立つた。

「先づあなたは虛言を言はないといふことを、右の手を擧げてお誓ひなさい。」

問問

私は右の手を擧げた。

「あなたは合衆國の市民ですか。」

「否。」

「あなたは合衆國の市民となる希望を持つてゐますか。」

私の心の中には或疑問が閃いた。幾人の日本人がこの問に對して「然り」と答へ得るであらう。日本人には合衆國の市民權を與へないことになつてゐる。併し、その市民權を得ようとする希望を持つてゐるかと問はれた時に、その希望だに持つてゐないと答へれば、それはつまりこの國に同化することを拒むものであらねばならぬ。太平洋沿岸でもこの同じ問を發してゐる。それについて我が同胞は何

憐憐

と答へてゐるであらう。私は暫く默然としてコロンビアの繪姿を眺めてゐた。

この國の市民になるには、その人の本國と、この國と一旦戰端を開いた曉には、その本國に對つて銃を把るといふことを誓はねばならぬ。私にそれが誓へようか。いや、私はこの國の市民となることを本心から望んでゐるだらうか。女神コロンビアの畫像は私が不知不識に抱いてゐた二重愛國心を憐むやうに見えた。

委員は緘默を守つて私の答を待つてゐた。

「否。」

と私は答へた。

牲性

「あなたは合衆國の軍隊に加はつて合衆國の敵と戰ふ意志を持つてゐませんか。」

私には答をするのが苦しかつた。私はこの國に十三年來住んでゐて、その間この國に養はれて來た。然るに、今この國が多くの犧牲を拂つて戰爭をしてゐる秋に當つて、この國の爲に戰ふといふ誓を拒まなければならないのを悲しんだ。若し一度意を決して合衆國の軍隊に加はつて大西洋を渡るならば、私は自分が生れた國土を愛するといふ狹いけれど深い愛國心を捨てなければならぬ。私はそれを、善い事と考へ得るけれども、私の肉體はまだ故國の土に屬し、私の靈魂はなほ祖先のそれに屬したものであること

を考へなければならぬ。私は

「否。」

と答へた。

「それでは、あなたは、あなたの本國に歸つて、あなたの本國の敵と戰ひますか。」

何といふ用心深い質問であらう。何といふ意味の廣汎な質問であらう。今私等の敵と見なしてゐるものは、獨逸及びその聯合國であるが、若し他日、日本とこの國と砲火の間に見ゆる日が來たとしたら、私等は本國に歸つて、この國と戰ふかといふ質問になつて來る。この國の市民になるの希望もない、この國の軍隊に加はるのも望まない、しかし、この國との戰には勇んで出るといふ誓を今私は立てねばならぬ。私はこの時、私等はこの國から排斥されても仕方がないと思つた。そして

「然り。」

と答へた。

斯うして、私はすぐ〳〵宣誓場を離れた。下を向いて人人の中を通つて歩廊に出た。

（成尋法師母）

もろこしも、天の下にてありと聞く照る日の本を忘れざらん、

（井上毅）

天津日の、本つ御國の、もと國の、もとのこゝろを、忘るゝなゆめ、

聯（聯）

排挑

成尋　白河天皇時代の僧、宋に渡りて密教を受く。

井上毅　熊本の人、文部大臣となる。子爵。明治二十八年歿、年五十二。

長岡護美　通稱監物、熊本の人、維新の志士、明治五年英國に留學す。子爵。明治三十九年歿、年六十五。

横山健堂　名は達三、山口縣の人、別號黑頭巾、文章家。

こと國に、八とせの春は、過せども、こゝろに消えぬ、富士のしら雪。

（長岡護美）

一一　果物

横山健堂

夏の初は、青梅こそ心地よきものなれ。青葉のしげれる枝に眞青の實の珠をなせる、美しといふにはあらねど清々し。

サクランボの涼趣は、全く青梅と相反す。青梅は二三顆小皿に盛るによろしく、これは累々數十顆を盤にし、光彩陸離たらしむるに妙あり。

「林檎食うて牡丹の前に死なん哉。」子規の此の句殁前四

子規　正岡子規、松山の人、明治の俳人。

芭蕉・蕪村　芭蕉・蕪村はともに德川時代の俳人。

昇昂

五年頃に成りし者なり。水菓子の詩史に子規の名を逸すべからず。苹の味必ずしも梨を壓するに至らず。然れどもその大にして美なるは、津々として詩趣を生ず。詩人の食物とすべきは苹なるべし。苹は舊日本にはなし。その味にも亦新日本の特調あり。芭蕉・蕪村に梨の味ありとせば、子規の句には自ら苹の味あるを覺ゆ。

人の未だ夏に馴れず、水菓子の拂底なるとき、夏橙市場に出づ。風貌堂々殆ど八百屋の店頭を壓す。帝都の人は葉蔭に薫れる夏橙を知らず。濃綠の葉の繁れる枝に、此の實の金色に輝く夕、庭に水打つて月の昇るを待つ、這般の涼趣片田舍の特有なるべし。夏橙は見るばかりにて涼味あり。

松下村塾　長州にあり、吉田松陰の家塾。

枯枝にの句　芭蕉の句。

俳徘

柿（柹）

その肉味の美なるものほど外に光澤の麗しきものあり。夏橙の本場は長州なり。松下村塾を環りて夏橙の薫ずるあり。松陰先生は夏橙の畑の草を拔きつゝ、門人に歴史を語り聞かせたり。

バナヽと鳳梨との詩趣は、新體詩のものなるべし。此の兩者舊日本になし。その詩趣も舊詩歌に求めがたし。東洋に於ける果物の、文學に最も豐富なるは桃なり。而して桃太郎に至りては、則ち御伽噺の國民的なるものなり。

「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」の一句、能く俳壇の舊套を道破す。而して此の句を想へば、秋晩の寥天萬木凋落して、紅柹ばかり枝に殘れる畫趣眼前に浮ぶ。吾輩は柹を推し

甜・甛

甲州　山梨縣。

往住

て日本の果王とするに躊躇せず。甜美にして豐滿なるその肉、黄葉の疎なる大木に紅く熟したる、食ふべく、畫くべく、古來果物の第一なり。柹は枝を添へたるがよし。小さく圓き物は、殊に枝を重ねて山のみやげとするによろし。

いちごは極めて心地よきものなり。彼の紅玉の燃ゆる中より涼味の湧出づるこそ殊に面白けれ。これを玻璃皿に盛りて、純白の砂糖をかくれば、滿開の紅梅に曉雪のふりかゝれる趣あり。

甲州は葡萄の國なり。「月の雫」の一語、人をして神往に堪へざらしむ。山に水晶あり、地に月の雫あり。吾輩未だ甲州を見ざれども、東海道の富士川を渡るごとに、水源なる美

しき國を想像す。藤棚と葡萄棚とは、屋外にあるべき家庭の棚ならずんばあらず。藤は白色をよろしとし、紫は葡萄に讓るべし。葡萄棚を茶の間の外に築きて、その下れる房に夏の風を樂しみ、秋の月を迎ふる亦清き樂なり。

石榴は花も葉も餘り引立たず。たゞその實、日本畫によろしく、油畫によろしく、且は盆栽にして花よりも畫趣あり。石榴の小粒は極めて美し。その味も亦清冷、仙味第一たるべし。

○

只今は失敬致候。お歸りの後、家人御賜物を運び來りて見せ候處、最早我慢の緒が切れ、こう〳〵一つねだりとり申候。此は當地にて蜂屋と申候やらん、我が鄕里にては祇園坊と申候。凡そ天下に柿多しといへども、此の柿に增すものは無之候處、根岸に無之候爲、終に口に入らず、鄕を出でて二十年、始めて好味に接し申候。定めて御持參困難なりしことと存候。右御禮まで。匆々不悉。

鄙にては祇園坊といふ、都にては蜂屋ともいふ

柿の王はこれ
味ひを何にたとへん形さへ濃きくれなゐの
玉のごとき柿

（柿の禮狀——正岡子規）

正岡子規　名は常規、松山市の人、俳人、明治三十五年歿、年三十六。

尾崎喜八　東京市の人、詩人。

一二　歸鄕

停車場を出て

尾崎喜八

土産の買物の包を小脇に
無味殺風景な白茶けた道を
足ばやに汗になつて
とう〳〵此の丘の上に立つ

あゝ緩かにうねる並木路のはづれ
高く青々と
海角に寄せて碎ける大波のやうな
一塊の森の頭
あれこそ私の住む村だ
何といふ美しい村だらう

晶昌

何といふ木立に惠まれた村だらう

七月の夕暮の空は
薄紫の晶玉の清らかさで
朱鷺の抜け毛のやうな細い雲が
すら〳〵と
輕い模樣を描いてゐる

私が其處の家に着く頃には
水の垂れさうなあの空へ
宵の明星がたつた一つ

陰陰

びかりと
金の印璽を捺すのだ

さうすると
村中が柔い深々とした蔭に滿たされ
月見草と小川とだけが闇に浮き
家や庭などは
咲亂れた星の花の下で
たゞ地上の小さな燈火の
光ばかりになつて了ふだらう

菊池幽芳
名は清、茨城縣の人、大阪毎日新聞社員。

其處へ歸つて
水を汲みあげ
汗をさら〳〵と流し去つて
さてこの包を解くのだ

嗚呼そのわが村わが家が
向うに見える

一三　詩的農園

菊池幽芳

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は北海道帝國大學に附屬せるものにして、

施旋　牧枚　氈・氊

實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全に近きのみならず、地は即ち石狩平野の一部なるが故に、到底内地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縱横に發揮せられて餘蘊なきに近し。然れども余はこゝに農園の設備を説かんとするものにあらず。余の記さんとするところは、たゞその風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連りて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指して、その際涯を知らず。萋々たる牧草氈の如き處、こゝにはかの

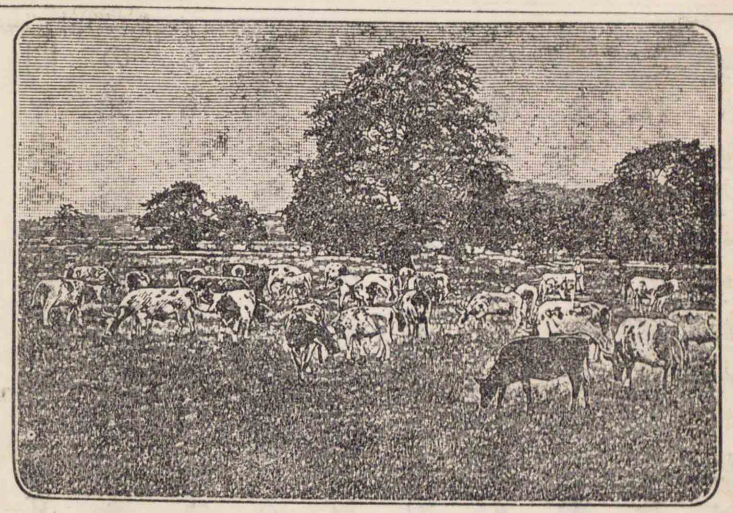
壤　閼（潤）

林中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空間を占めて處まばらに立てる楡ありて、晝は殘る隈なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるるものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸取りて鬱蒼たるその枝葉は以て百歩の地を蔽ひ、亭々たるその幹は以て百尺の空を摩す。一たび足をこの農園の牧場に入るゝもの、誰か遺憾なく發揮せられたるこの楡の美に驚嘆せざらん。

それ廣漠たる平野の緑は既に人の心を快潤ならしむ。これに喬木の亭々たるを配する時、誰か一段の風致を添へ來るを覺えざらん。たゞその喬木の種類によつては、また

幅福

鬱（欝）



札幌農園

その風致に多少の増減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は、松にあらず、杉にあらず、實にその高さとともに深さを有し、深さとともにまたその幅を有するもの、分明にいへば、その枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝なほ暗き樹陰を作る喬木たらざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の森々として青緑の平野に立てる様を想像せよ。何ぞそ

榆榆

の畫の如くにしてまた詩の如くなるや。人もし十分にかかる想像を回らすことを得たりとせば、その人は即ち遺憾なく札幌農園をその腦裡に描き得たるなり。

農園が榆によつてその風趣を加ふることかくの如し。然れども是なほ靜態に於ける風趣のみ。更にこの間に牛を點じ羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。

札幌農園の綿羊種群集

丈高く、四肢長く、體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を有するホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短きエイアシャー種の牛などが、此處に彼處に草を食へる、或はさまよへる、或は尾を振れる、更に麗しき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づき來るを見ずや。もしこの世に樂園といふものありとせば、その關門は實にかくの如き處なるべし。その繪畫的なる、その詩的なる、また附近の建物と相待つてその米國的なる、少くともこゝに來るものは、內地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるなら

ホルスタイン　丁抹に境する普魯西の一州。この種の牛は乳量多し。

エイアシャー　スコットランド海邊の州名。この種の牛は乳量多くして且つ濃厚。

メリノ種　綿羊種の最良なるもの。

畫畫

ん。札幌農園は實にかくの如き特色を有す。余はかくの如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、またこの學校より往々文章の士を出せることの決して偶然にあらざるを知れり。（日本海周遊記）

若山牧水　名は繁、宮崎縣の人、歌人。昭和三年歿、年四十四。

一四　夏を愛す

若山牧水

夏の眞晝の靜けさは冬の眞夜中の靜けさと似てゐる。おなじく身動きひとつ出來ない樣な靜けさを感ずること があるが、しかも冬と違つて無氣味な靜けさではない、ものなつかしい靜けさである。明るい靜けさである。

こもり居の家の庭べに咲く花は

おほかた紅し梅雨あがるころを

私のいま住んでゐる附近には辨慶蟹が非常に多い。赤みがゝつた、小さな蟹である。庭の木にも登れば、部屋の中にも上がつて來る。ツイ二三日前、何の氣なしに緣側のスリツパを履かうとすると、その爪先に這入り込んでゐて大いに驚いた。今年三歳になる男の子のよき遊び友だちである。

これが庭の石榴の木に、どうかすると三四疋も相次いで這ひ登つてゐることがある。苔の生えかけた古木の幹だけに、大變にその形が面白い。眞紅な花の散り敷く梅雨の

頃が最もいゝ。

草花いぢりも夏の一德であらう。氣を換へるに非常にいゝ。筆の進まぬ時、氣持の重い時、ひよいと庭の畑に出て、草をむしり水を遣る。言はず聽かずの暫しの時間を過ごすべく、私には今これが一番である。花もよく、四五株の野菜を植うるも愛らしい。

その廣葉夏の朝明によきものと

三畝(畝)がほどは芋(竿)も植ゑたり

みじか夜のあはれさも私の好きな一つである。春の夜、

萌
崩

秋の夜、冬の夜、すべてあくどいが、夏にはそれがない。香のけむりの立ち昇るにも似たはかなさがある。

ここに私はその明方を愛する。眼が覺むれば枕元の窓がほのかに明るい。時計を見れば四時まだ前、或は少し過ぎてゐる。立つて窓を開くと、かろやかに風が流れて、蚊がひそかに明るみへまつてゆく。

「土用なかばに秋風ぞ吹く」といふ言葉がある。恐らく誰いふとなく云ひすてたものであらうが、この言葉は私には何ともいへぬ寂寥味を帶びて響いて來る。

土用芽といつて、春一度芽の萌えた樹木に、再び芽の萌え

芽茅

風の音にぞ
秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる。（古今集、藤原敏行）

出すことがある。夏も更けて、その青葉も殆んどもう黑みを含んで來たころに、うす鈍い黃色をふいて萌えて出るこの土用芽はまことに見る目寂しいものである。溫度などから云へばまさに暑いまさかりで、多くの人はたゞもう汗にまみれて瞼を厚くしてゐるころである。

そのころに何處ともなしに忍びやかにつめたい風が吹いてゐるのである。眼に見えぬ秋のおとづれである。「風の音にぞ驚かれぬる」の誇張より、土用なかばに秋風ぞ吹く」の正直な俚言がそのころどれだけ私には身にひびいて聞えて來るであらう。

一五　九十九里

徳富蘆花

徳富蘆花　名は健次郎、熊本縣の人、蘇峯の弟、文學者。昭和二年歿、年六十。

一　禊

古事記に、伊邪那岐命が黄泉の國から命からく現世に逃歸つて、身の汚れを清める爲に、筑紫の日向の橘の小門の檍原に往つて、海水を浴び、禊し祓し給うたといふ記事があります。

大正六年の三月に、「死の蔭に」を出して死の蔭を出た私は、山の上の仁泉に、妻諸共新生の春四十日が間産湯を浴びた後、更に夏の一月を、永劫の動搖、永劫の戰鬪の中に飛込んで、其處から乏しい私共の戰鬪力を攫んで來ることを思ひ立

「死の蔭に」　朝鮮滿洲地方旅行記。

山上の仁泉　伊香保溫泉仁泉亭。

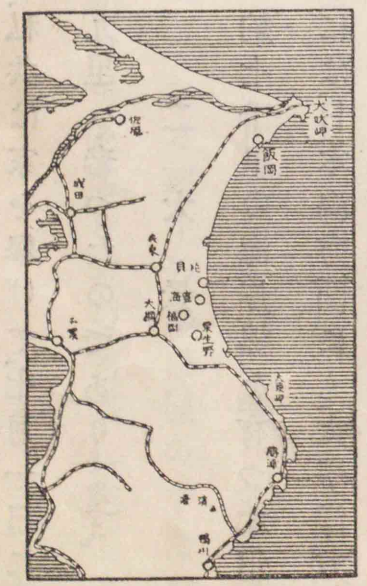
ちました。私共の心は海に騁せたのであります。私共が相州逗子の生活は最早十七年の昔になりました。武藏野の生活を始めてからでも、最早十年餘りになります。海が遠くなつた。海へ往かう。禊に往かう。全人を鹽しに往かう。鬪ふ力を養ひに往かう。海！海に限る。それも逗子のやうに優しい海ではつまらぬ。大洋へ往かう。荒海へ往かう。力强い大濤の脈搏つ外洋へ往かう。

九十九里——さうだ。

九十九里へ往かうと私は叫びました。さうし

武藏野生活　東京府北多摩郡千歲村大字粕谷の住居を指す。

九十九里　千葉縣、大東崎より飯岡に至る砂濱、約十六里强。

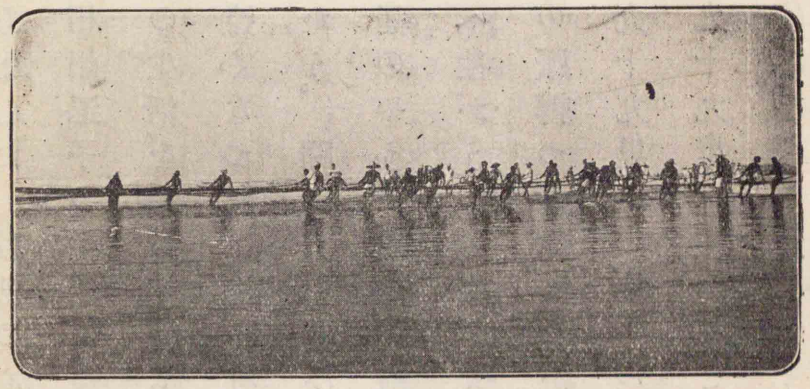


側測

て、私共は家を擧げて、七月一日に九十九里へ參つたのであります。

二　大　景

約七千里の海岸線を有つ本州日本には、日本海方面にも、太平洋方面にも、隨分長い砂濱はありますが、上總の九十九里ぐらゐ美しい濱はありません。北、飯岡の岬から、南、大東岬まで、六町一里で九十九里、實測で十六里半の砂濱は、其處に其の美しい形を破るべき一の小山一の岩礁



九十九里濱の地曳網

拘抱　齋齊

さへなく、永劫に白波蹴立てて襲ひ寄る大東洋に對して、弛む時なく半月の弓をじわりと張つて受止めてゐます。九十九里の懷は淺い。最長徑が三里には過ぎない。併し、胸は闊い。十六里半に及んでゐます。右に大東、左に飯岡、この二つの岬を兩腕と伸して、十六里半の纖い細かい軟かな砂は、雄哮して跳りかゝる大東洋を慈母のやうな其の胸にやんわりと搔抱いて居るのであります。此の大きな胸の言はば鳩尾が片貝村なのです。片貝から南に隣して豐海村があります。其の字の一つなる栗生の、小松原の中にある中西君の別莊茉莉舍を借りて、そこを私の書齋に宛てました。

股役　矢失

三　自適

九十九里の七月は涼しい、もつと暑くてもよいと思ふ程涼しいのでした。起きぬけに一度、午後に一度海に入る外は、朝の地曳の魚買ひ、夕蔭の散歩、日ざかりには白蚊張を、ゴール代りに頭からかぶつて晝寢をしました。外の小路で松から松に細引で的をつるして、猿股一つで大弓を射るのも、樂の一つでした。人通りが少いので危險はありませんが、矢が砂にもぐつたり松林にそれたりして、時々探すに骨を折りました。そんな時は毎日のやうに、胡瓜・茄子・隱元何くれと野菜を持つて來てくれる裏のKちやんが、子供の眼さとく探してくれました。柏谷から持參の朝顔が茉莉舍

絡給　緣椽

の手水鉢の下の籬に絡んで咲く頃には、庭の草地できりぎりすが鳴き出しました。七八歳の昔、水泳歸りのくたびれ耳に河原で聞いたその聲が、夢のやうに蘇つて來ました。

四　茉莉舍

茉莉舍からは庭の小松を見越して、鰯煮る家の、今は煙も絶えて居る煙突のはづれから、本の少々ながら海が眺められます。七月の日が赫々と照つて、十數里の沖を流れる黑潮の、まだ其の先の其の先の限ない先から、海原を掃つて來る南風が、氣を入れてしつかり吹く日は、濃い綠靑の海に雪の流の跳り上り跳り上りするのが、茉莉舍の緣から見られます。此の樣な日には、頭上の大空では、天を中斷するやう

な、すばらしい白旗雲が、見る〳〵靡いて北に流れ、茉莉舍を圍む何千株の若松の限ない松葉の一つ〳〵が、風に競うて南風の曲を歌ひます。人の靈魂を梳いて行くやうな颯々の其の音は、私共の存在を清々しくせずには措きません。

五　海の氣分

海の氣分も色々に變ります。風と日の調子を合せて乘地になつた花やいだ氣分の日もあります。催眠藥の霧などかけられて、九十九里の其の懷ながら眠つた樣な日もあります。物憂げな空が薄曇つて、さしもの荒海が嗚咽するやうに聲を呑む日もあります。かと思へば、凄じい怒を起して轟と吼えつゝ千尋の底から湧上り、煮えくり返り、轟と

崩れては再び地心へ轟と捲き込んで行く勢に、九十九里の陸は戰き、茉莉舍などは木の葉の如く震へる心地の日もあります。（新春）

○

「山」の無い文章は川の無い平野のやうなもので、讀者に沙漠の荒涼を感ぜしめます。沙漠の中にさへ沃地があります。綠滴り泉迸る沃地は卽ち沙漠の山です。文章にして「山」が無くんば、無味乾燥、恰も蠟を嚙むに似たものがありませう。

さて文章の「山」は何處に置くべきか。一概には申されませぬが、理想として文の結尾に置くべきです。少くとも結尾に近く置くべきです。

試みに盧花氏の「九十九里」の序論とも見るべき「禊」の一段を

八波則吉
福岡縣の人、第五高等學校教授。

讀んで見ませう。……

諸君、この文章の山は何處でせう。いふまでも無く、「九十九里――さうだ、九十九里へ行かう。」です。「海が遠くなつたから徐々に進んで、「海、海に限る。それも逗子のやうな海ではつまらぬ。」と輕く前に應じて、「太洋へ往かう、荒海へ往かう。力强い云々。」と、重ね〳〵て、「九十九里――さうだ。」と、自答し、「九十九里へ往かう。」と、斷定するところ正に千鈞の重みがあります。「そして私共は」と言つて、「山」を少し下つた處で文を結んだのです。

若しこの「禊」の一文にして、「九十九里へ往かう」の一句が、前半又は後半の上部に點出してあつたら、吾々を喜ばすこと、決して、結尾に見出した時ほど强くは無かつたに極つてゐます。

諸君、「山」の置場所は卽ち文の死活問題です。

（文章の山――八波則吉）

十七八歳の頃
明治二十一、二年頃。

一六　文章の道

島崎藤村

一

十七八歳の頃、私は隅田川で能く泳いだことがある。全く水には經驗のなかつた私も、漸く岸を離れることが出來る樣になり、次第に中流までも進み得るやうになつて、一夏も水泳場に通ふ中には、向うの河岸まで泳ぎ越すことが出來た。更に又一夏も泳いで見たら、焦心つて水ばかり飲んでゐた頃には能くも分らなかつた瀨の早い遲いも分つて來たし、

復腹　嘆・歎

淡水と潮水の雜り合つたあの川の中の冷たい處と温かい處とも分つて來たし、水鳥のやうに浮きつ沈みつする他の泳ぎ手の樣子を泳ぎながらに見ることも出來るやうになつた。板子なしには溺れる外なかつた私も、二夏の末には、優に隅田川を横切つて往復することが出來た。私は、普通の泳ぎ手が行ける處までは、自分も到達し得たやうに感じた。けれども、それ以上に進むことはなか〳〵容易でなかつた。私の身體は水に重かつたから、樂に浮身の出來る人を見たり、拔手の上手な人を見れば、全く感嘆して了つた。

文章の道にも、誰にでも到達し得られるやうな境地があるに相違ない。そして、根氣さへあれば、其處まで行くことは決して困難でないに相違ない。

小諸（長野縣北佐久郡、千曲河畔。）　慢漫

二

信州の小諸にゐた時分、私は弓の稽古をしたことがある。誰でも、最初の中は、的に向つて矢を當てることばかりを心掛ける。「唯當りさへすればいゝ。」斯う思ふ時代には、幸に一本の矢が的を貫くことはあつても、他の矢は思ひも寄らぬ場所へ飛んで行く。射手の心に賴む所もなく、矢の曲直を辨別する力もなく、さうして幸に當つた矢は、徒らにうるさい高慢な「熟練」を思はせるばかりだ。

小諸に住む舊士族の一人で、弓術に心得のある老人が私達の矢場に來た。其の老人は、先づ「姿勢」を正すことを私達

に教へてくれた。それからの私達の矢は、たゞひ的を貫くことが出來ないやうな場合でも、一手揃ひで同じ場所を行くやうになつた。

是は文章の道にもあてはめて見ることが出來る。唯好い文章ばかり作らうと思つて焦心することは、決して目的を達する道でない。眞に好い文章を作らうと思へば、どうしても先づ「自己」から正してかゝらねばならない。

三

同じ頃、私は家の裏にある畠へ出て、鍬を執つたことがある。讀書の傍、よく鍬を擔いで行つて、土を耕して見た。私は先づ荒れた畠の地面を掘り起すことから始めた。土を

裏・裡
掘・堀

碎いた。小石を擇り分けた。地均しをした。汗を流してそれをやつた。葱の苗や馬鈴薯の芽の樣な植ゑ易いものから作つて見た。其の畠には、大根・白菜・茄子・豌豆・胡瓜などの類をも植ゑて見た。馬鈴薯の花が盛りの頃、試みに土の中を探つて見ると、はや丸い薯が幾つも〳〵其の根元の方から出て來た。豌豆の蔓は長く延びて、人の丈よりも高く手にからみついた。畠の中には、嫩かい莢を摘む鋏の音が聞えた。粗末ながらも自分で作つた新鮮な野菜が私の食卓に上るやうになつた。それから、私は周圍にある耕地を見て廻り、本當の百姓の手で能く整理されて居る畠の間などを歩き廻る度に、耕作の苦心といふものが痛切に自分の

嫩

漕遭

身に感じられるやうになつた。（私は或耕作を通して、非常に嚴肅な念に打たれたことを今でも能く思ひ出すことが出來る。）

文章の手本とすべきものが何程我々の周圍にあつても、それを悟らなければ仕方がない。それを悟らうとするには、どうしても先づ自分で試みなければならない。「試みる」といふことは「悟る」といふことの第一歩だ。

四

淺草の新片町に住んでゐた頃、家が淺草橋や兩國橋に近いので、私はあの隅田川の界隈を漕廻つたことがある。最初の中は無暗と手足を動かし、あの長さ一丈ばかりもある

衝衝

艪を前へ押し手許へ引きして、骨折つて見た。それでも舟は思ふやうに進まなかつた。が、次第々々に手足を動かすことが少くて、からだ全體の力でゆつくりと艪を押すことが出來るやうになつた。「向ふから大きな傳馬がやつて來たぞ、あいつに一つ衝突しないやうに。」斯う思つて漕いで行く樂みなども、それから起つて來た。其の後、船頭のする所を見ると、實にゆつくりしたものだ。そこには「力の省略」があり、「簡素の美」があつた。

文章の道に於ても、無暗と筆を弄することが決して自己の眞の「表白」とはならない。眞に好い文章には、眞に好い「結晶」の力がある。（飯倉だより）

——峠の茶屋——

一七　峠の茶屋

夏目漱石

夏目漱石　名は金之助、東京の人、文學者、大正五年十二月歿、年五十。

峠　待

「おい」と聲を掛けたが、返事がない。

軒下から奥を覗くと、煤けた障子が立てきつてある。向側は見えない。五六足の足鞋が淋しさうに庇から吊されて、屈託氣にふらり〳〵と搖れる。下に駄菓子の箱が三つばかり並んで、そばに五厘錢と文久錢とが散らばつてゐる。

「おい」と、また聲をかける。土間の隅に片寄せてある臼の上にふくれて居た雞が、驚いて眼をさます。くゝゝゝゝと騷ぎ出す。敷居の外に、土竈が今しがたの雨に濡れて、半分程色が變つてゐる。その上に眞黑な茶釜がかけてある

搏博
駈（驅）
枡（桝）

が、土の茶釜か銀の茶釜かわからない。幸に、下は焚きつけてある。

返事がないから、無斷ですつと這入つて、床几の上へ腰をおろした。雞は羽搏きをして臼から飛びおりる。今度は疊の上にあがつた。障子がしめてなければ、奥まで駈拔ける氣かもしれない。雄が太い聲でこけつこつこと云ふと、雌が細い聲でけつけつこつこといふ。まるで自分を狐か狗の樣に考へてゐるらしい。

床几の上には、一升枡程な煙草盆が閑靜に控へて、中には、とぐろを捲いた線香が日の移るを知らぬ顔で、頗る悠長に燻つてゐる。烈しかつた雨も次第に收まる。暫くすると

奥の方から足音がして、煤けた障子がさらりと開く。中から一人の婆さんが出る。

どうせ誰れか出るだらうとは思つてゐた。竈に火は燃えてゐる。菓子箱の上に錢が散らばつてゐる。線香は呑氣に燻つてゐる。どうせ出るには極まつてゐる。併し自分の店を明放しても苦にもならないと見えるところが、少し都とは違つてゐる。返事がないのに床几に腰をかけて何時までも待つてゐるのも面白い。その上、出て來た婆さんの顔が氣に入つた。

二三年前、寶生の舞臺で高砂を見た事がある。その時、これは美しい活人畫だと思つた。箒を擔いだ爺さんが橋懸

寶生　能樂の一派。
擔　擔

を五六歩來て、そろりと後向になつて、婆さんと向ひ合ふ。その向ひ合つた姿勢が今でも眼につく。自分の席からは婆さんの顔が殆ど眞向きに見えたから、嗚呼、美しいと思つた時に、その表情はぴしやりと心のカメラに燒きついてしまつた。茶店の婆さんの顔はこの寫眞に血を通はした程似てゐる。

「お婆さん、一寸ここを借りたよ。」

「はい、これは一向存じませんで。」

「大分降つたね。」

「生憎なお天氣で、嘸、お困りで御座んしよ。おう、おう、大分お濡れなさつた。今、火を焚いて上げましよ。」

婆　姿
濡　儒

「そこをもう少し燃しつけてくれれば、あたりながら乾かすよ。どうも少し休んだら寒くなつた。」

「へえ、只今、焚いて上げます。まあ御茶を一つ。」

と立ちあがりながら、「しつ、しつ」と二聲で雞を追ひおろす。

こゝゝと駈出した夫婦は、焦茶色の疊から駄菓子箱の中を蹈みつけて、往來へ飛びだす。雄の方が逃げるとき、駄菓子の箱の上へ糞をした。

「まあ一つ。」と、婆さんは何時の間にか刳抜盆の上に茶碗を載せて出す。茶の色の黑く焦げてゐる底に、一筆がきの梅の花が三輪、無雜作に燒きつけてある。

婆さんは袖無の上から襷をかけて竈の前へうづくまる。

碗椀

自分は懷から寫生帖を取出して、婆さんの横顏を寫しながら話をしかける。

「閑靜でいゝね。」

「へえ、御覽の通りの山里で。」

「鶯は鳴くかね。」

「えゝ、毎日のやうに鳴きます。この邊は夏も鳴きます。」

「聞きたいな。ちつとも聞えないと、なほ聞きたい。」

「生憎、今日は、先刻の雨で、何處ぞへ逃げました。」

折から竈の中がぱち〳〵と鳴つて、赤い火がさつと風を起して、一尺あまり吹出す。

「さあ、おあたり。さぞお寒かろ。」

憎僧

庇疵

といふ。軒端を見ると、青い煙がつき當つて崩れながらに、微かな痕をまだ板庇にからんでゐる。

「あゝ、好い心持だ。お蔭で生きかへつた。」

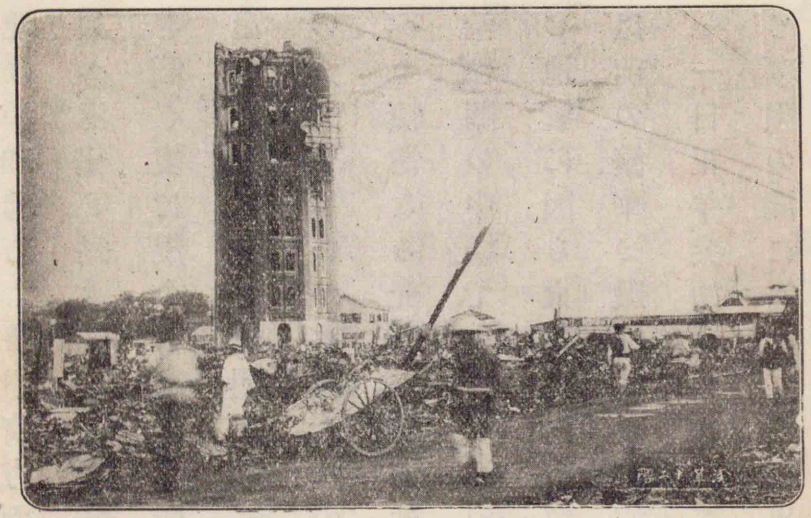
「いゝ工合に霽れました。そら、天狗巖が見えます。」

逡巡として曇りがちなる空を、もどかしこばかりに吹拂ふ山嵐の、思切りよく通り拔けた前山の一角は、未練もなく晴盡して、老嫗の指さす方に、荒削りの柱の如く聳えるのが天狗巖ださうだ。（漱石全集）

○

生憎　産土　草臥　黄昏　劍呑　屹度

勿體　雜木　具合　合點　天井　鳥渡　白雨



折れ殘りし淩雲閣

一八　大震災記

大正十二年九月一日午前十一時五十八分、突如として起つた關東方面の大地震は、帝都を中心として横濱以南三浦半島全部、相模灘の沿岸藤澤・平塚・小田原より伊豆半島の熱海・伊東、北して箱根・山北・御殿場・沼津方面に及び、東は房總半島の西部沿岸地區、

髣髴・彷彿

殷段

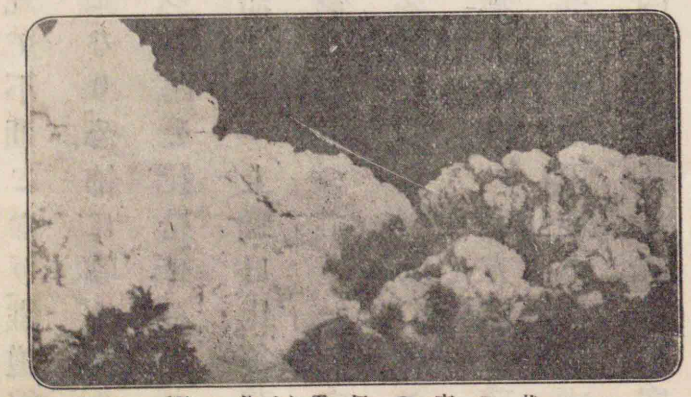
北は浦和地方より甲府方面に至る廣大なる區域に慘害を與へ、海嘯と劫火これに伴ひ、忽ちにして幾十百萬の建築物を倒し、更に幾十百萬の人命を害ひ、又更に幾十百億の財寶を燒き、通信交通機關を壞滅に歸せしめた。蓋し有史以來の大天災。いかに最大級の文字を以てするも、此の戰慄すべき悽愴なる光景を髣髴せしめることはできぬ。帝國政治機關の中樞であり、東洋の文化の中心である帝都は、地震と地震に因る火災のため、忽ち一望千里の焦土と化し、一瞬以前の繁華と殷賑は、夢の如く消え去つた。

一日正午、突如激烈なる搖れを感じて、市民の悉くが驚愕と狼狽の間に、街上に飛び出した時は、既に全市の十數箇所

淺草凌雲閣 俗に十二階といふ。

縺連

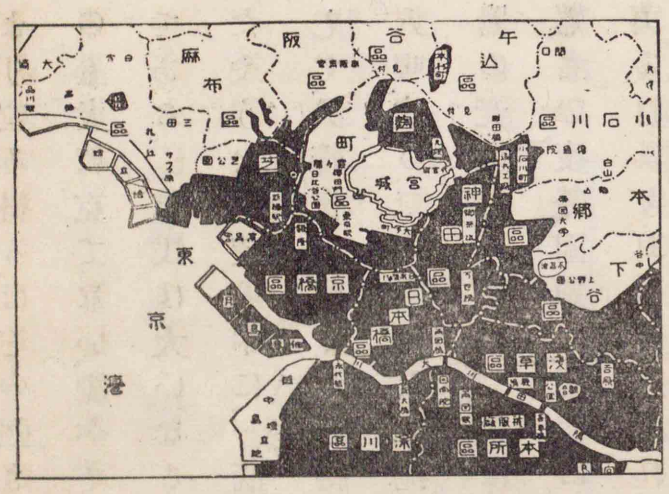
から(其の後檢事局で調査の結果百三十四箇所より發火と判明)火の手が揚つてゐた。其の後激震は間斷なく打續いたが、初震に於いて、既に淺草凌雲閣の如きは、八階以上が二つに折れて倒潰墜落、十數戸の民家を壓し潰した。近代建築の美を誇る大ビルディングも、倒潰又は龜裂を生じ、市中を蜘蛛の巣に張廻した電線は、亂麻の如く縺れ、或は切斷して地上に落下し、水道の鐵管は隨所に破裂し、電車線路は絶えず蛇の如くにうねり



其の夜の怪雲（九月一日）

を打つて崩れ、市外への電信電話も凡て不通となり、鐵道線路も大破して、帝都は全く孤立狀態となり、恐怖に戰く人の叫び、火に追はれ煙にむせんで、一條の遁路を發見せんとする大群集の騷擾、さながらに見る焦熱地獄。上野・日比谷・芝の各公園、宮城前の如き廣場も、時の移るに隨つて僅かの家財を提げ、命から〳〵避難せんとする多くの人を以て滿された。陽、漸く沈まんとする頃より、猛火は山の手方面を殘して殆ど全市を押し包み、黑煙天に冲し、折柄の旋風に倍、威力を加へて、紅蓮の焰は縱に毒舌を閃かす。其の區域の廣きと斷水とのため、近衞と第一師團の軍隊も、警視廳の消防も、施すに術なく、徒らに奔命に疲るゝのみである。

斯くて夜に入り、八方に逃げまどふ避難者の混亂は言語に絕し、すさまじき爆發、大厦の燒け崩るゝ響、風の唸、火の唸、誰一人として生きた心地もなく、血族其の所在を失うて四散しながらも、なほ一條の活路を得んと走り、喘ぎ、倒れ、傷つき、溺るゝ間に、本郷・神田・淺草方面を舐め盡した猛火は、下谷・千住・本所・深川・日本橋・京橋・麴町・芝・赤坂方面に於いて、いよ〳〵暴威を逞くし、火光は遠く輕井澤方面



東京市燒失區域

より望み得るほどの強さとなつた。最早人間の力ではこの暴虐に克てない、總べてを自然のなすがまゝに委すのみである。市民は大いなる恐怖と、大いなる騷擾と、死に面したやうな絶望の中に、一滴の水一粒の糧をも得ることなくして、只管夜の明くるを待つた。二日の朝は來たれど、高さ八哩、廣さ二十哩の天を掩ひつくした濛々たる黑煙のため、陽の光も見えない。火は少しも衰へず各方面に延燒し、避難者の疲勞困憊は極度に達し、流言蜚語は疾風の如く、幾百萬の口より耳へ傳へられ、人心の不安と動搖とは、刻一刻その度を增すのみである。

虐虐

是に於て內田臨時首相は、先づ非常徵發令、臨時震災事務局設置、戒嚴令適用の三勅令を奏請公布し、戒嚴令を布いて警備を嚴にし、次いで內閣組織の大命を拜してゐた山本伯は、急遽閣員の人選を終りて勅裁を仰ぎ、親任式は猛火の中で行はれた。前代未聞の出來事である。斯くて四十萬の家を燒き、百五十萬の市民をして、忽ちその日より雨露を凌ぐに由なからしめた震火は、三日正午頃に至り、漸く鎭靜の狀態となつたのである。（關東大震記）

內田臨時首相　內田康哉。

山本伯　伯爵山本權兵衞。

一九　感謝

三宅周太郎

日暮里から汽車が出るなどと聞いたのも、やつと三日の夕方であつた。

三宅周太郎　兵庫縣の人、劇評家。

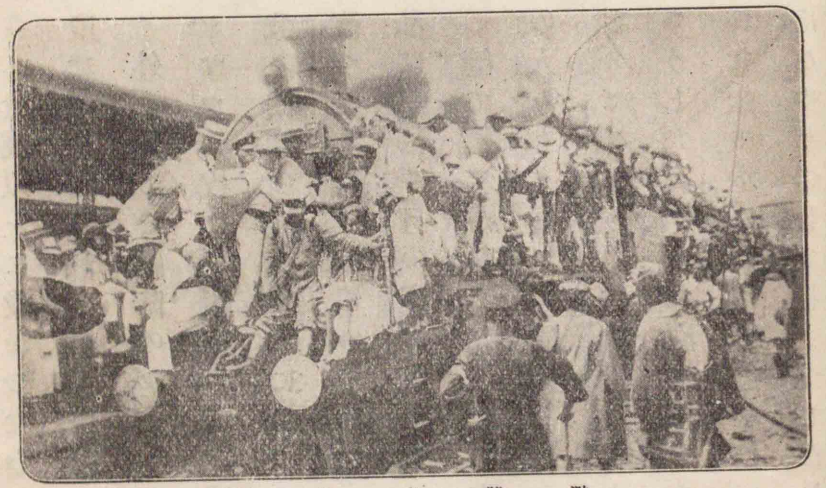
日暮里（につぽり）　東京市外。上野公園の北。

私はいろ〳〵考へぬいたうへ、一刻も早く東京を離れるのが得策だと一人で主張した。東京で餓死する位なら、たとひ一里でも二里でも、東京を離れて田舍にゐる方が、餓死の日を延ばせる筈だと思つたからだ。でも、五人の同志が出て來た。かうして私は、自分が先に立つて五人の人々と共に、四日の正午前、かん〳〵照る本郷を後にした。

途中の難澁は一寸筆につくせない。自分としてもいろ〳〵物質的の損害は受けた。燒け出されないといひ條、つまりは燒け出されたと同樣の災害をいろ〳〵の事柄で蒙つてゐる。でも、廻り廻つてやつと七日の朝、東京を立つてから實に四日目の朝、私達は全く案外な元氣で無事に大阪へ歸れた。

私は何を措いても、東京から出た信越線・中央線沿道の人々に心から感謝の言葉を捧げたい。

浦和　埼玉縣北足立郡、東京の西北六里餘。



避難者輸送

先づ、私はがつくり力も根もぬけ果てて、貨物列車で鮨詰以上の鮨詰になつて、東京から一時間ほど來たところの浦和驛へ着いた。と、實に案外である。そこのプラットホームには、ひやひやとした清水が無數の桶になみ〳〵と汲み湛へられてあるではないか。「水！」と思はず人人は鬨の聲をつくつた。と、その瞬間である。同じやうに戸の隙間から水を求めてゐた私の手に、ひやつとした水氣のものが落ちた。いはずと知れた氷である。一杯の清水

羅罷

さへ金錢以上に貴かつたのに、氷など今は全く私の想像以外のものであつた。が、氷が手に載つてゐるのである。

外を見ると、霜降のヅボンを甲斐々々しく股までまくり上げて、シヤツ一枚に制帽姿の若い浦和中學の學生が、水や氷を、それこそ我々同樣の汗みどろになつて、無數の蟻のやうな列車の罹災者に配つてくれてゐるのである。求める者、與へる者、共に死物狂ひだ。私は思はず目の裏が熱くなつた。

軈て汽笛が鳴つた。私の東京を立つた四日頃は、斯ういふ沿道の人々も、まだ〳〵罹災者をうまく扱ひなれてゐない筈である。我々とて、さうした救護など、まるで思ひもよらなかつたから。が、さうした行屆いた親切振である。でも、人々は事の意外に、與へられた氷や水にほつと息をついてしまつて、汽車が出かけても、寧ろぼんやりとしてしまつてゐた。私も嬉しさにくら〳〵と倒れさ

岡部　埼玉縣大里郡。熊谷町の西北。

松井田　群馬縣碓氷郡松井田町。

うになつたが、思はず「有難う」とどなれた。と、私の箱から續いて、有難う」の聲が續いた。すると前後に「有難う」「有難う」が叫ばれた。見ると、立つてゐる若々しい中學生は、皆々青ざめた顏をして、親しげに我々に目禮してくれる。私は又思はず涙ぐんだ。汽車が驛を去つた頃、感じ易くなつてゐる多くの人々は、いづれも手拭で目ぶたを拭いてゐた。

又、岡部といふ處では、じやがいもの蒸したのをくれた。無論、そこへくる迄も、必ず一つの驛ごとに、何か食ひ物か飲み物をくれて優しくいたはつてくれる。が、腸を痛めてゐる私などには、折角の握り飯も、水も飲めない。じつと飢を忍んでゐると、じやがいもだ。之なら私にも初めて安心して食へる。

輕井澤の手前の松井田では、村の若い娘さん達が揃つて接待をしてくれた。誰しもさうした優しいもてなしは、東京を出て以來

最初である。而も女性だけに、汽車が出る時「御無事で」といつて、揃つて送つてくれる。それが皆木綿物の着物であるのが一層我々に溫かみを與へた。

小諸で、水と思つて小さなビンを貰ふと、なまぬるい。一口飲むと、實に玄米茶なのである。私は實際有難かつた。こゝで初めて安心して、先のじやがいもと此玄米茶で腹をこしらへた。

中央線になつて、松本では扇子のない人に扇子をくれた、一分の隙もなく詰められた人々は、この扇子で、いかに涼を納れた事であらう。又、浴衣も上げますよといつてゐる聲が聞えた。

木曾福島では、パンをくれた。私はしみ〴〵有難かつた。そしてもういつの間にか、どこでも水でなく麥湯をくれる。段々設備が行屆いたのであらう。

上松では、どうであらう西瓜を振舞つてゐた。

松本　長野縣東筑摩郡の中部。

木曾福島　長野縣西筑摩郡、木曾川の東岸。

上松（あげまつ）　福島の次の驛。

中津川では、更に亦恐れ入つた事には味噌汁を振舞つた。人々は武者ぶりついて、がぶ〴〵飲み續けた。」

大井では牛乳をくれた。

かうして我々は、一文の金がなくても、實に種々の「珍味」に快よい飽滿を覺えつゝ名古屋に這入つたのであつた。が、その信越線と中央線との長い沿道の間、私は幾度となく外の人家を觀察した。所が、失禮ながら殆ど一樣に、皆つゝましい農家ばかりだ。それが三日以來、晝夜の別なくどん〴〵來る汽車に、あゝした接待をしてくれる。それも浦和その他二三は、同じく多少ながら災害に會つてゐる土地だ。而も、それが本統のつゝましい農民だ。恐らく彼等は三膳の飯の一半をさいて、我々に馳走をしてくれたのであらう。麥を食ひながら我々には米を與へた人もあるであらう。これは必ず我々の買ひかぶりではあるまい。なぜといつて、名古屋

中津川、大井。　ともに岐阜縣惠那郡。

までの長い間の、それ等の人々の接待の物腰恰好に溢るゝ一脈の溫情は、實に我々が生を享けて以來最初に味はふといふも過言でない質朴な中に籠る細かい同情の現れとして、しみ〴〵と我々の胸を衝くからである。」

ボーイ・スカウト Boy Scout.

三島章道　名は通陽、東京の人、子爵、文學者。

先度の震災　大正十二年九月一日の關東大震災。

二〇　ボーイ・スカウト

三島章道

團體的社會的の訓練。　最近になつて漸く我國にも、ボーイ・スカウトの機運が向いて來た。殊に震災後に於て、スカウト運動は全國に起つて來た。先度の震災は我々に何を敎へたか。あの震災で潰れもしなければ、又燒かれもしなかつたものがある。それは何かと云へば、矢張それは、人

の心である。人の强さである。

東京の人は震災時に於て何を發見したかと云へば、先づ賴むべきは「自己の力」、次は「團體の力」「社會の力」だと云ふことであらう。火災は恐ろしいが團體訓練の力は、たしかにこれに打勝つものであることを知つた。又火災が起つて了つたら、それを團體の力で消止めるより仕方がないが、その火災を起す前に、先づ注意することがもつと大切であらう。社會の爲に自己の責任を感じて、災害を未然に防ぐ、それが卽ち社會的訓練の一つである。次にあゝいふ場合、我我の行ふことは「本能的自治」とも云ふべきもので、自警團などはその一端として表れたものであるが、團體的社會的訓

練の無かつた我々は、遂にそれにも失敗をした。

ボーイ・スカウトとは、この自己の力を養ひ、且つ團體的訓練・社會的訓練自治と云ふ事を、子供の時からさせようとする所のものである。

野外教育。　現今の教育は、屋外より室内へと入り、机上の學問に向つて進みつゝある。ボーイ・スカウトの教育は、屋外へ屋外へと出て行くもので、學校の休日を利用して、なるたけ子供等を野外に伴れ出し、その健康を增進させると共に、實際に就いて動物・植物・天文・地理・化學等を教へるものである。

國際的運動。　ボーイ・スカウトを以て軍國主義のやう

ハワイ島
北太平洋に在り、米領、

ボーイスカウトの敬禮

に見る人があるが、決して然うではない。ボーイ・スカウトの最後の目的は「世界の平和」にあるのである。私は曾てハワイ島に行つたことがある。其時日・支・米・土人の子供等が、皆仲好く公園で一緒に遊んでゐるのを見て、子供の國は眞に天國だ、子供の時からかうして一緒にすれば、誰だつて仲よくなると思つたことがある。スカウト

運動は卽ちそれであつて、今こゝに日本の一少年團が出來ればそれは世界のスカウトと兄弟になるので、共に手を取つて助け合ふことになるのである。スカウトでは、この「兄弟」と云ふ字を大へん用ひる。ブラザース・フロム・ジャパンと云ふやうなことを盛に用ひる。スカウト運動は國際的にして同時に國家的のものである。

ブラザース・フロム・ジャパン　Brothers from Japan.

三本指の敬禮。

ボーイ・スカウトは、必ず三本指の敬禮をする。これは世界各國共通である。それはスカウトには、世界共通の三つの大切の綱領があるので、それを忘れない爲、それを表はす爲である。その三つとは、第一、神及び皇帝(米・佛等の共和國では「神及び國家」といふ)に盡す。第二、自ら進んで他人を助ける。第三、スカウトの守則を守り、體を丈夫にする、と云ふのである。スカウトの守則も世界中殆ど同じで、正直にすること、快活にすること等、十乃至十二箇條あるのである。

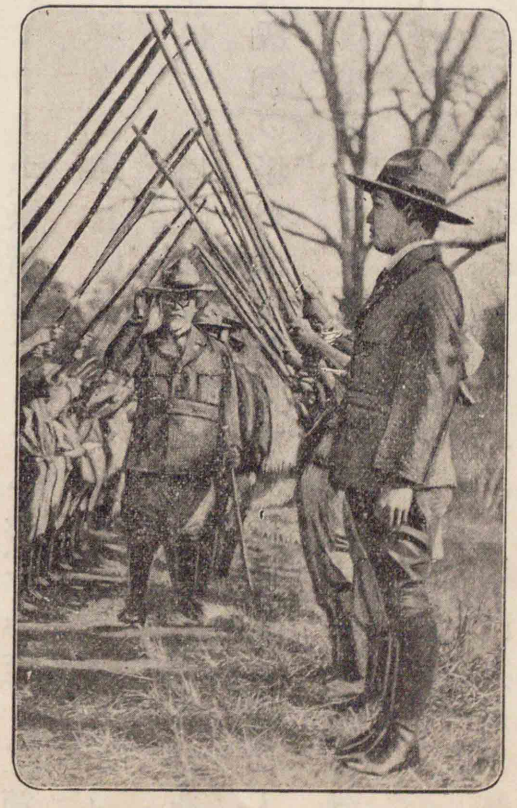
緩暖

そなへよ、つねに。標語はビー・プリペーアド("Be prepared!")で、卽ち一旦緩急の場合は勿論、先度のやうな災害にも勿論、又常に我々は用意がなくてはならぬ。スカウトは「さあ來い!」でなければならぬと云ふのである。

南阿戰爭　南アフリカ共和國と英國との戰爭。西暦一八九九年。

スカウトの意味。なぜボーイ・スカウトといふかと云ふと、それはこの運動の創始者ボーデン・パウエル將軍が、南阿戰爭當時、ボーイのスカウト(斥候)を使つたが、それが大人

以上の働をした。其後英國に歸ると、國では子供の體質が弱くなり、不良少年が多くて困るので、子供を集めてこの運動を始め、ボーイ・スカウトと名づけたのである。そしてスカウトの意味は平和の斥候といふ意味にしてゐる。即ちスカウトは常に本隊より一歩先に進んで、後から來る人の爲に盡すのがその役目である。一九〇八年、かのパウエル將軍が英國に之を始めて以來、世界中にこの運動が擴まり、世界に二百萬人の團員が居り、手に手を取つてゐる。



ボーイスカウトの整列

斥

ウルフ・カッブ Wolf Cub.

年齢と組織。

年齢は、外國では大抵一樣の分け方で、九歲より十二歲までをウルフ・カッブと稱し、十二歲より十八・九・二十歲までをボーイ・スカウトと稱するのであるが、日本ではこれを「少年團」としたため、年齢を少さく思はれて困る。一番子供の大切の時は、十四五から十七八の時で、この時こそ心身共に善くなるか惡くなるかの境で、この時の訓練こそ必要なのである。

また組織は大抵八人を一班として、それに班長を置いて

自治せしめ、班が集つて隊となり、隊が集つて團をなすのである。

日本こそ。　日本の少年團は、英・米・佛・伊等のそれに比して、まだ〳〵幼稚である。が、善い人々が澤山居るから、今に善いものになるであらう。一體歴史をたどると、日本の鹿兒島の「健兒の社」などがそれにあたるので、して見れば日本の方がずつと古いのであるのを、多少逆輸入の形である。ボーデン・パウエルも日本に學んだと云つてゐる位だ。それ故日本こそこの運動が世界に誇るものになつていゝのだと、私は思つてゐる。

山本有三
本名勇造、栃木縣の人、戯曲小説作者。

二一　おみおつけ

山本有三

山本有三

もう二十年も前の話である。たしか八月の末頃と思ふが、やけに日の照りこむ汚い校舎で、或中學の編入試驗を受けたことがある。ところが唱歌と體操を除いた外、中學でやる學科の總べての試驗を、三日間ほどに、午前・午後ぶつ通しで一時にやられたので、その苦しさは一通りではなかつた。殊に私はその一二年前まで小僧に行つてゐて、順序だつた學問といふものを何もしてゐなかつたから一層辛かつた。僅かに神田の英語學校と豫備校とで、速成に中學の學科を學んだのを唯一の力として、試驗場に臨んだのであつた。

そんなわけだから、私は隨分無理な勉強をした。今でも時々あの當時のやうにふん張つて見たいと思ふことがあるが、どうしてもあんな無茶な事は出來ない。それは學問をすることに反對だつた父親に對する意地もあつたからだが、一つには一緒に居た野村といふいゝ競爭者があつたからだ。

野村とは英語學校で知合になつたのである。二人とも貧乏だつたので、部屋代を半減するために、六疊の小さな所に一緒に自炊をやつてゐた。それは西小川町の路地の奥の、大工さんの家の二階だつた。御飯は下で炊いてもらつて、おかずはこつちで作ることにしてゐた。が、お互に手がかゝる事を厭つて、毎日煮豆か佃煮で間に合せてゐた。おかずを買ひに行く事や、食事の後片付などは一日交代でやつてゐた。

野村は海軍兵學校志願で、軍人にならうといふ位の男だから、體

西小川町
東京市神田區。

格はすてきによかつた。どちらかといふと粘る方の質ではあるが、頭も隨分よかつた。英語でも數學でも、小僧上りの私よりはずつと出來た。併し彼に負けるのは口惜しいので、私は自分の體には無理と思はれる位の勉強をした。試驗にパスするやうにといふ事よりは、野村に負けないやうにといふ念の方が遙かに強い位だつた。

「どうだ。これ出來るか。」なんて、野村に代數の問題なんか出されると、そんなものは中學の試驗には出つこないむづかしい問題なのに、差迫つた試驗の準備はそつちのけにして、それを解く事に熱中するのだつた。一緒に居ただけに、何かにつけ野村が競爭相手だつた。

午前は英語、午後は豫備校に通ひ、夜は一時から二時位まで勉強した。そして朝は五時といふと、もう起き出して机の前に坐つた。

漕糟

けれども、野村は私よりも試驗の期日が迫つてゐないのにもかゝはらず、いつも遲くまで起きてゐて、然も朝は私よりももつと早かつた。今朝こそ俺の方が早いだらうと思つて目を覺まして見ると、彼はとうに起きてゐた。學問の上ばかりでなしに、勉强の仕振までが、どんなにやつてもかなはないので、終に私は口惜しいよりは、野村が憎らしい位になつて來た。

試驗の最後の日の事である。その日は幾何だの、動植物だの、生理だの、圖畫だの、科目の多い日だつた。他のものはどうやら漕ぎつけたと思ふが、幾何が一題どうしても分らないので、それが氣になつて仕方がなかつた。ぐつたりして宿に歸つて行くと、

「山本か。」と野村が二階から聲をかけた。

「うん。」

「梯子段を氣をつけろよ。」相變らず橫柄な口振だつた。

階偕

「どうしたんだい。」上りながら私が尋ねた。

「そこに鍋がかゝつてゐるからさ。」

見ると梯子段を上り切つた三尺の板の間に、七輪を据ゑて、鍋がかけてあつた。緣側のないこの二階では、七輪はこゝより外に据ゑる處はなかつた。私はぎしぎしする梯子段をそつと上つた。

「貴樣、試驗で疲れたらうと思つたから、今日はおみおつけをこしらへた。」

もう幾日二人はおみおつけを吸はなかつたことか。私が當番の日で、今日はおみおつけを吸ひたいなと思ふ時でも、時間が惜しくつて、そんな手のかゝるものは遂に一度もこしらへなかつた。

野村ときた日には、おかずが何にも無くなつてゐるのに、買ひに行く時間さへ惜しがつて、

「おい山本。今日は鹽をかけて我慢をしろ。」

なごと、平氣でいひ出すほど。極端な男なのに、それが今日は思ひがけなく七輪に火を起して、おみおつけを煮てゐてくれたのには、私は一寸動かされた。

「そりや有難う。僕はこの頃隨分おみおつけが飲みたかつたんだ。」

「僕もさ。こいつを吸ふと精が出るからな。――おい、今日の幾何はどうした。」

「一つ分らないのがあるんだ。」

「どんなの。」私は問題を示した。

「これかい。」野村は輕くさういつた。こんなもの何でもないぢやないかといふやうな、例の彼の素振がちらと閃いた。私は口惜しかつたけれども、出來なかつたのだから默つてゐるより外はなかつた。併し野村にもさうすぐは解けなかつた。何度もやりかけては消してゐた。

輕（軽）

厄介　危

烈　裂

「一寸厄介な問題だらう。」

「う。ひねつてある。しかし出來ない事はないよ。」

彼は鉛筆の先を舐めながら、なほ問題を見つめてゐた。その時烈しくシユウツとおみおつけの煮えこぼれる音がした。二人とも幾何に氣をとられて、すつかりその方を忘れてゐたのである。

「おい。鍋！鍋！鍋！」と野村は頓狂な聲を出して叫んだ。しかし矢張机から離れなかつた。私はあわてて鍋のところへ飛んで行つた。併し咄嗟だつたものだから、蓋をとればいゝものを、鍋を下さうとして、その縁を摑み上げたので、

「熱ちい！」といつたまゝ鍋をその場に取落してしまつた。幸に火傷はしなかつたけれども、鍋を落したので、そこら中をおみおつけだらけにしてしまつた。その上梯子段の下は押入になつてゐるので、こぼれた汁が板のつぎ目から押入の中にだら〳〵垂れ

ていつた。下のおかみさんは、その騷ぎに驚いて、急いで押入のものを取出した。が、それでも間に合はなかつたと見えて、

「あら、布團にも蚊帳にもかゝつちまつたわ。あら、あら、こつちの方まで流れて……」

殊更あてつけに言つてゐるのではないのだらうが、押入の中を片付けながら、獨言のやうにぶつ〳〵言つてゐるのが、私にはたまらなかつた。

おみおつけを煮てくれた事は嬉しかつたが、かうなると、なまじつかおみおつけなんか拵へた野村が怨めしかつた。自分の粗忽は棚に上げて、「こんなものさへ拵へなければ、こぼす心配も何もなかつたのに。」私はこんな事をしきりに思つた。それよりも何よりも、自分が一番氣になつた事は、試驗の最終日におみおつけをこぼしたといふ事だつた。試驗の前後は誰にしても緣起を擔ぎたがる時だ。然るに、試驗場から歸るや否や、鍋をひつくりかへした事は、どうしてもいゝ辻占とは思へない。第一、幾何は一題確實に出來てゐないし、その他試驗場で出來たと思つたものでも、よく考へて見ると、どれもこれもあやふやなやうな氣がして、愈〻不安になつて來た。しかしたつた一年やそこらしか勉强しないで、五年級に飛込まうといふのが、土臺、蟲がよすぎる。今度は落第する方が當然なんだ。そんな風に考へては見るものの、これが父親に知れたら、

「それ見ろ。だから學問はやめるがいゝ。」

と言はれやしないかと思つて、それが心配でたまらなかつた。

「試驗の成績が發表される日、私はこは〳〵其の中學校の掲示場へ歩いて行つた。意外。合格者の中に自分の名前が這入つてゐるではないか。

その晩は、たしか野村にトンカツを奢つてやつたやうに思つてゐる。

（詩と隨筆集）

二二　歸り行く勞働者

百田宗治

百田宗治　大阪市の人、詩人。

一人の大きな人間が私の前を歩いて行く
私はその後からついて行く

それはなんと立派な人間だらう
ぐしゃ〳〵になつた頭髮
日にやけて赤茶けた強さうな皮膚
廣い肩幅
汗みどろになつて破れた着物

だが　その腕は何うだ
着物からあらはれた腕は
その丸起した力瘤はどうだ
その幅びろい掌は
丈夫さうなあの足を見よ
しつかりと地上を踏みしめて行くその足取はどうだ
一歩々々
大地とその強い落ちついた接觸はどうだ
黙して歩いて行く一人の巨人
何處まで彼は歩みつゞけて行くのだらう

おゝ　彼は河岸の荷揚場から來たのだ
汗と力の一日の勞働を終へて
今そこから家へかへるのだ
遠い場末の家路に向ふのだ
妻と子供の待つてゐる家へ歸るのだ
入日は彼に一杯に照り
影は長く地に曳いてゐる

あゝ　萬物この夕陽に照輝く中に
巨人だけひとり自己の姿を運ぶのだ
彼だけひとり眞に運くのだ
その光を受けるのだ

地上たのしく生き行くのだ　（日本近代名詩集）

二三　死して惜まるゝ人となれ

嘉納治五郎

生れて而して長じ、長じて而して死す。禽獸かくの如く草木かくの如く、人間亦かくの如し。されば人として禽獸草木と異ならんと欲せば、生れがひある人とならんことを要す。予は更に前途有爲の諸子に向つて、死して擧國の悼惜を受くる人たらんことを望む。

人生れて呱々の聲を發するより、長じて一箇の成人となり、自營・自活して世に立つに至るまで、他より受くる所の恩

嘉納治五郎　大阪府の人、教育家、又柔道家。
悼　掉
營（営）

苦若

德一ならず。これを近くして、まづ父母の鴻恩あり。我等の生るるや自營の道を知らず、自活の道を知らず、たゞ泣くことを知り、笑ふことを知るのみ。此の間、晝夜を問はず、寒暑を論ぜず、心身の疲勞を忘れ、千辛萬苦以て我等を保育し、以て我が生長を遂げしむるものは、豈我等の父母にあらずや。之に次ぐに師長の恩あり。我等が僅に黑白を辨ずる頃より、長じて社會に出づるに至るまで、我に誨ふるに事理を以てし、我に說くに道德を以てし、必要なる學術上の知識を授け、身體保全の法を講ぜしめ、我等をして將來世間に獨立する基礎を成さしむるものは、我が師長にあらずや。

更に又至尊及び國家の恩あり。至尊は仁慈なる大御心

社趾

を以て臣民を愛撫し、宏大なる聖德を以て國家を統治し給ひ、國家各種の機關は生民の安寧を維持し、その福祉を增進し、兇惡を正し、不逞を罰し、以て我が父母師長をして我等に對する慈愛・薰陶の務を完うせしめ、又我等をして危難を憂へずして安全なる發育を遂ぐるを得しむ。然らずんば、我等は亂離塗炭の苦に陷らん。我等の安全なる發育を遂げて一箇の成人となるは、實に此等數者の恩あるに由る。然らば則ち我等が成人の後に於て此等數者に酬ゆるは、人間當然の義務にあらずや。

然れども人間の生涯は實に區々たり。或はその修養の時期に當りて、懶惰・遊蕩の間に貴重なる光陰を送り、體軀徒

碑稗稗

らに長じて、當に自營自活以てわが生育の恩に報ゆべき時に至るも、無爲無能その父母の恩に報ゆること能はず、その師長の恩に酬ゆること能はざる者あり。況んや國家が生を成す所以に酬ゆることをや。朝に起きて而して食ひ、夕に食うて而して眠る。かくの如くにして老い、かくの如くにして死す。是所謂醉生夢死する者にして、實に國家の蠹賊、人間の最下なるものなり。

又その無能かくまで甚しきに至らず、何らか一種の事に從ひ、國家に對して多少の裨益をなし、以て自活の道を求め、僅かに父母を養ひ、自ら衣食して一生を送る者は、之を前の醉生夢死する者に比すれば、勝ること萬々なりと雖も、かく

遺遺

の如きは僅かに自ら受くる所の恩に酬ゆるに過ぎずして、その一生の經營事業の永く後世に德し、其の流風遺韻の遠く子孫を動かすに足るものなし。かくの如きは我等の理想とすべき所にあらず。

我等は人間天賦の能力を善養し、利用し、その畢生の事業は以て我等が父母・師長・國家・社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の綽々たるものあり、後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ、國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを長へに追憶せしめんことを期すべし。我等が前途有爲の少壯諸子に待つ所のものは實に是に外ならず。

それ生きて一鄉のために功ある者は死して一鄉のため

嗚嗚

に惜まれ、一郡のために盡せる者は一郡の爲に哀しまる。若しそれ其の事業國家全體の進歩を助成し、その忠誠よく闔國民に認めらるゝものに至りては、その事業の何たるを問はず、その人の存否は國家の進運に關すること甚だ大なるものあり。是を以て其の人一たび逝くや、國を擧げて之を惜まざるはなし。嗚呼天下の廣き、逝く者は日夜にこれあり、而してその死の天下に知らるゝ者果して幾人かある。少壯の諸子よ。諸子の前途は遼遠なり。遼遠なりと雖も一生の覺悟は卽ち今日より定め置かざるべからず。知らず、諸子は死して人に顧みられざる人とならんとするか一鄕・一郡の爲に惜まるゝ人とならんとするか、抑、亦擧國の

悼惜を受くる士とならんと欲するか。（國士）

人は一代名は末代。
骨は埋むとも名は埋（ウヅ）めず。
豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

後篇

東西遊記抄

東西遊記に就いて

橘南谿

（中外醫事新報に據る）

東西南北到らざる處なし。然るに此の書たゞ東西遊記と名づくるもの

東西遊記に就いて

東遊記五卷・同後編五卷は、橘南谿が天明四年の秋から同六年の夏にかけて、東海・東山・北陸の地方を漫遊した折の紀行であり、西遊記五卷・同續編五卷は是より先、天明二年の秋から同三年の秋にかけて、中國・四國・九州を旅した時の記錄である。自らその卷頭に記して、予醫學修行の爲に漫遊すること前後合せて五年、

は、京を中央とし、二つに分ちて東西とし、南北はその中にこむるものなり。」と云つてゐるので、その旅行の目的と書名の據る所を知ることが出來る。

南谿、名は春暉（はるとみ）、字は惠風、宮川氏、伊勢の人、南谿はその號である。醫を業として京都に居つた。性、淡泊にして風雅、文學を嗜み、和歌を詠じ、又好んで四方を漫遊し、足跡殆ど天下に遍かつた。その主とする所は醫學の研究にあつたけれど、博き趣味識と鋭き觀察眼とは、諸國の奇談異聞から山川氣候人情風俗に至るまで、見聞するところ悉く筆にして、平易流暢の文、讀む者をして興趣深く、言ふべからざる妙味を覺えしめる。蓋し明治以前に於ける旅行記中、最も出色あるものである。著述には多くの醫書の外、漢語律呂考・北窓瑣談等がある。文化二年（約一二〇年前）伏見で歿した。年五十三。或は云ふ五十四と。

一　熊突

加賀越中は世に名高き熊多きところなり。熊膽（くまのい）などもこの邊より出づるを極上の品と定む。余、越中にありし時、飛驒境の山中の人に出會ひて、熊を取ることを聞くに、その獵者も亦勇猛なり。冬に至り雪降りつもるときは、熊みな穴に入り住む。その時獵者ども薪木を多く持行きて、熊の住める穴の中へ投げ入るゝに、熊怒りてその薪木を後の方へ押しやる程に、穴の奥の方次第に詰まりて、その熊だん〳〵に穴の口の方へ出で、つひには穴みなつまりて、熊、穴の外へ出づる時、長さ一間半の手鎗を以て、月輪のあたりをねらひて突くなり。熊、突かれながら其の鎗を、かなぐり捨てんとして引く程に、鎗いよ〳〵深く身を貫く。獵者は始終その鎗を離さず取付き居て、加勢の獵者を待つ。加勢の獵者走りかゝりて、鉞（まさかり）を

以て熊の頭を打ちて取るなり。若し鎗を損じぬれば、熊の掌にて鎗の穂先を握るに、丈夫なる鎗の身三つ四つに折れ碎く。されば獵者もつかみ殺さるとなり。

余これを聞いて、かく手詰の危き働をせんよりは、など鐵砲にては打たざるといへば、鐵砲はなほ危しといふ。いかにといふに、若し月輪を打ちはづす時は、たとひ鐵砲のたま熊の身を貫くとも、忽ち飛びかゝりてつかみ殺すなり。鎗は、獵者その鎗に取付き居る故に、飛びかかること能はず。されば命を失ふことなしとなり。たゞ手負の熊にはなか〳〵近づき難きものなり。手負はざる間はおだやか

親不知子不知　越後國西頸城郡。越中の國境に接せる海岸約五十町の雛所。

市振　同上。

歌　同上。

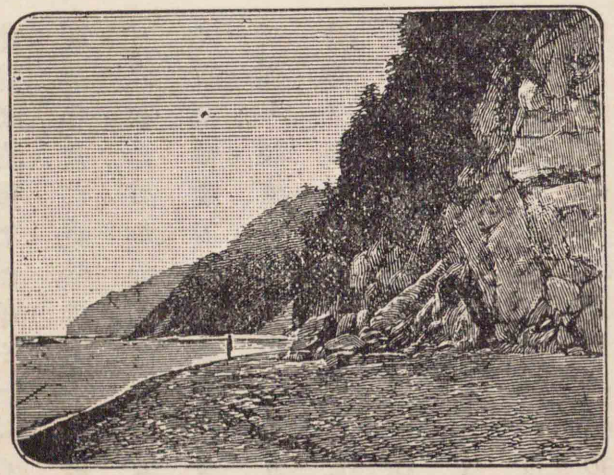
なるものゆゑ、近づくこと甚だ自由なりと語れり。

誠に漁者は水に勇に、獵師は山に勇あり。盗賊は又利欲に勇あり。皆その習ふところに勇ありと思はる。（東遊記卷一）

二　親不知

越中・越後の境に、親不知・子不知といふ處あり。北陸道第一の難處として、あまねく人の知る所なり。越中立山の裾、北海へ張り出したる處にて、市振（いちぶり）といふ驛より歌といふ處迄を山の下と稱して二里半あり。立山の裾なる故に斷巖絶壁にて、路徑もつけがたき故に波打際を旅人通行するなり。一方は壁を立てたる如き山、一方は大海なり。風無く波靜かなる日は、旅人通行する道幅七八間、或は十間計あり。又處により半町・一町もある處あり。然るに風起り波荒き時は、直に彼の絶壁の處へ波打ちかけて通路なし。右

二里半のうちに一箇處、長さ五六町の間、別して道幅狹き處あるを、世に親不知子不知といふ。甚だ難處にして、親も子を思ふにいとまなしといふ心より、土俗稱し來りたるなり。其の間絶壁の根に岩穴ありて、十間程づつ置きて其の穴いくつも有り。波打ちよする時は通行の人此の穴に走り入りて、波の引く時を見合せて走り過ぎ、又波來れば次の穴に入りてこれを避く。もし北風强き時は、數日を經といへども通行ならずとなり。去々年も越後の商人越中に越ゆるとて、此處を無理に通りかゝり、中程にて波風殊に强くなり、件の穴に逃げ入りたるに、穴際まで大波打ちかけて走り過ぐべき隙なく、八日が間其の穴の中に居、やう〳〵波風靜まり、命たすかり、其の穴を出でたり。「其の間の饑渴、心遣ひ、いふに詞なし。」と語れり。波高き日無理に通りかゝり、穴中に避け隱れて、出づべき隙なく、二日三日穴に居る人は月々多き事とぞ。



親不知

余が通行せし時は雨天にて、波風はさのみ强からざりしかども、上の山は傾くがごとく聳え、寄せ來る波は足を引き去れば、其の恐ろしき事今に忘れず。余が友、富山の佐伯某、此處を通りしには、其の身は肩輿に乘り居しが、人足二三十人にて、其の肩輿を守護し、波の間を走りぬけては穴に隱れて、やう〳〵に過ぎしと語れり。總じて此の邊の人足は、波を避けて走ることに妙を得たり。されば此の地の人夫大勢を召し連れ行く時は、大抵の波風には滯ることなしといへり。

扨此の親不知を過ぎて、少し山のふところに人家ある處を歌村

駒返　親不知の東に在り。

青海　越後國西頸城郡。

一人守れば　李白の蜀道難に「一夫當レ關、萬夫莫レ開。」

といふ。其の村を過ぎ又波打際を行けば、駒返と云ふ難處あり。此處は波風なき時といへども、常に山の根へ波打ちかけ、通路なり難きゆゑに、絶壁の中半に岩を穿ちて細き路をつけ、旅人通行す。其の間わづかの處なれども、馬上にて通りがたき故に、駒返と名づく。馬は兩方の驛より牽き來り、荷物はそのわづかの處を人夫にて送り越すなり。歌村より一里半にして青海といふ驛あり。山下を通りぬけて、少し廣みたる處なり。市振より青海まで四里の難所なり。風波の時は、王侯の勢にても越ゆること難し。誠に一人これを守れば、萬夫も過ぐること能はざるの要害の地なり。故に市振は御領所にて關あり、往來の人を改む。余醫者にて總髪なり、故に別して丁寧に吟味ありき。誠にさもあるべし。他處と違ひ一方は大海、一方は萬仞の高山、南の方へ數十里連り聳えたれば、廻りても通るべき道なし。天險とはかゝる處をいふべし。かほ

藤樹先生　中江藤樹、近江の人、名は原、藤樹と號す。世に近江聖人といふ、慶安元年（約二八〇年前）歿、年四十一。

大溝　小川村と共に湖西の高島郡にあり。

分部侯　大溝藩主分部氏、領地二萬石。

王陽明　明の哲學者にして陽明學を開く。

どの難所なれども、夏の頃天氣格別晴朗にして波風靜かなる日は、道路に少しの高低もなく、絲を引きたる如き波打際の事なれば、難所とも知らず、只風景のよき處とのみ思ひて通行する人多しとなり。（東遊記卷四）

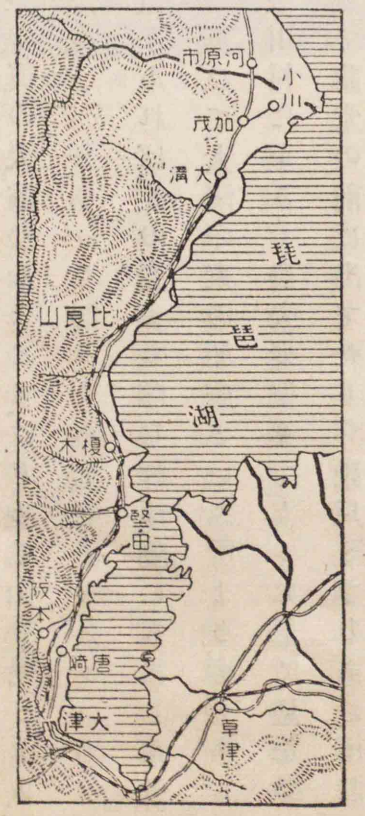
三　藤樹先生

先生は俗稱中江與右衞門といひて、江州大溝の在中、小川村の產にて分部侯の領地の百姓なり。王陽明流の學者なりしが、其の德行近時の學者の及ぶ所にあらずとぞ思はる。

先年余聞きし事あり。尾州の一士人、用事ありて此の邊を過ぎ、先生の墓所小川村にありと聞きて、畑うつ農夫に尋ねしに、「畑道なれば知れ申すまじ。案内して參らせん。」とて、先に立ちて行く。程なく小さき藁屋に至り「暫し待たせ給へ。」とて、内に入る。やがて出

づるを見るに、木綿の新しきひとへ物に布の小紋の羽織を着たり。彼の士人驚きて、さて〳〵丁寧なる男かな。墓だに教へ得さすれば滿足なるに、と思ひもて行くうち、墓所にいたりぬ。彼の農夫竹垣の戸を開き、「いざ入りて拜し給へ。」といひて、其の身は戸外に拜伏せり。士人大いに驚き、さては衣服を改め着せしは、我が爲にはあらで、先生を敬するにてありけりと心づき、「さても汝は藤樹の家來筋の者にてやある。」と問へば、「さには候はず。されど此の村の者は、一人として先生の大恩を蒙らざるは無し。」「親をうやまひ子をしたしむ事を辨へ知りたるは、先生の御蔭なれば、必ずおろそかに思ふべからず。」と、我が父母も常々をしへ候ひぬ。」と語る。士人も始は只なほざりに一見の心にて來りしが、此の農夫の樣子を見聞するに、今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。

其の後、余、肥後にて村井某に親しく交りしに、この人、或日外より歸り語りしは、「さても今日珍らしき墨跡を見たり。此の國の家老何某の方へ、近き頃江州より來りし聟養子あり。其の方へ用事あり、行きて物語する序に、ふと思ひ出でて、『そこの御里方の御領分に、中江藤樹といひし人ありし由、御存知にもや。其の手跡などは所持したまはずや。』」と語り出でしに、彼の人座を改め、「藤樹先生の御事は、我が父祖以來尊敬いたし候ひて、老父我を愛するのあまり、遠方へ斯く參るについて、かねて祕藏の一軸を出して得させぬ。御所望ならば見せ申すべし。」とて、奥に入り禮服に改め、一軸を携へ出でて床にかけ、遙かに引きさがりて



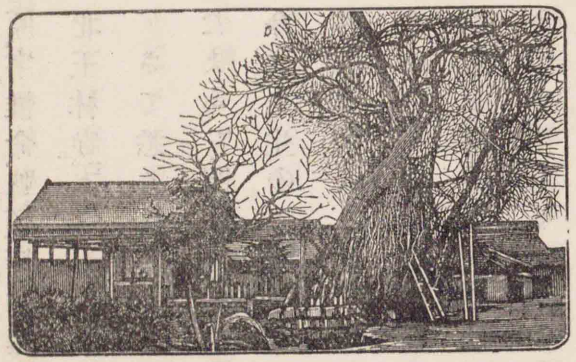
拜せられぬ。其の尊敬かくばかりなれば、我も手あらひ口そゝぎなどして、拜してやみぬ。分部侯にありては、畢竟領地の一農夫なるを、かくまで敬せらるゝ事、代々賢を愛し德を敬ひ給ふことも有り難く、又藤樹先生の眞の大儒なることも、はじめて知りぬ。」と申されき。

此の二事耳に殘りあれば、此の度よき序なれば、墓にも謁し、講堂をも一見せばやと思ひて、大溝の東の加茂といふ所より、南へ入ること八町にして小川村に至る。農夫老婆までも、くはしく道を教へ、迷ふこともなくて講堂の前に出でたり。雨戸とざしあれば、其のとなり志村某といふ醫者の許をたづねて、講堂を拜したき由いひ入るゝに、「まづ玄關へ上り給へ。」といふ。「草鞋がけなれば、只かりそめに講堂の案内を」といへど、強ひて足そゝぎの水など持ち來るまゝ、やむことを得ず、草鞋脚絆など解きて玄關へ上るに、某出で迎

朱熹　南宋の大儒にして、朱子學を開く。白鹿洞書院を今の江西省内に興し、學規を作る。

ふ。余、講堂を拜見し神主をも拜したき由乞へば、某奥に入り、禮服を着して、講堂の鍵を手に持ち「いざ來り給へ。」と引き連れて行く。

さて講堂を開きたるに、堂はかやぶきにて間數四間あり。書院は南面にて十五疊、講場なり。其の次は對客の間、八疊に床あり。



藤樹書院

其の次は十疊、其の次は臺所なり。正面緣側の上に「藤樹書院」といふ四字の額あり、「分部昌命拜書」とあり。十疊敷の間に、朱熹の白鹿洞の規則を板に書きてかけたり。さばかり相違の學風なるに、此の文をかけられたるも殊勝に覺ゆ。押入の内に、深衣を着せる繪像あり、釋菜の時の圖なりと云ふ。其の前に厨子あり、其の内に神主あり。上箱に「先生姓中江、諱

原、字惟命、號顧軒、稱藤樹先生。慶安元年戊子八月二十五日卒。葬邑東北玉林寺。の三十八字あり。箱の内の神主、常法の如し。

さて悉く見終りて某の宅へ戻り、「いかなれば、かく此の堂を司りたまふ。」と問ふに、「父祖代々門人にして、殊に昔よりかく隣家に住み、今は先生の子孫も無ければ、かくは預り來れるなり。殊更今にては、よき門人もなくなりぬれば、毎月六度づつ村民を集め、論語を講ずるも、某を無理に其の人に當てられて、勤め申すなり。又春秋の釋菜を村中集りて勤むるにも、某を頭取とせるゆゑ、かく鍵をも預り居る事なり。講堂の修復は領主より力を添へられて、領主も折折參詣あるに、禮服を着せずしては堂中へ入り給はず。」となり。

それより先生の出處を尋ぬるに、「先生三十餘にて、伊豫の大洲侯の招きに應ぜらる。先生の老母船をきらひ、四國に渡り得ず、江州に殘りゐて先生を愛し慕はるゝ故、やむことを得ず強ひて官祿を

大洲　藩主加藤氏、領地五萬石。

備前　備前岡山藩主池田光政をいふ。

熊澤　熊澤蕃山。後に見ゆ。

辭し、いとまを願はれしに、侯惜しみてゆるさざれば、願既に三度に及びて後、願書を出し捨てにして、大洲を忍び出でて歸り去れり。元孝心より出でたる事ゆゑ、侯もいとまを賜はりぬ。それより江州に歸り老母を養はれしなり。其の後諸侯より招きありしかど、再び仕へられず。備前の招きにも門人の熊澤を出され、幾程なくて死去あり。わづかに四十一歳なり。此の講堂の建ちしも、死去二三年前の事なり。先生の嫡子德右衞門、常省先生と稱す。多病なりしかど、壽は七十二歳まで保てり。其の人、子なくして、藤樹先生の子孫絶えたりき。對馬の家中に兄弟の家ありて、今に中江を名乘るとの噂なり。」と某語れり。されども、其の餘教近鄕に深く染み入りて、殊更此の小川村の百姓は、年若き者といへども、毎夜集會して手習し、かりそめにも酒など打飲み、亂舞音曲などをすることなく、まして博奕などはいふまでもなし。誠に此の邊の風儀、溫和

淳朴にして、見る所聞く所感に堪へず。有り難き事どもなり。前の尾張肥後の物語相違なき事を知る。

熊澤先生は其の門人なり。此の人藤樹先生に從はれし始を尋ぬるに、其の頃加賀の飛脚、金子二百兩を預り持ちて京へ登るに、江州河原市より輕尻の馬をやとひ、榎木の宿に泊る。馬方は河原市へ歸り、馬を洗はんと鞍を解きしに、鞍の下より財布一つ出でたり。こりあげて見れば金二百兩あり。馬方大いに驚き、今の飛脚の取り忘れたるにこそと思へば、其の儘榎木に走り行き、飛脚の泊れる宿に至り、對面して委しく尋ね問ふに、相違なければ、其の金を取り出して返しけるに、飛脚は死にたる者の蘇りたる心地して、悅びのあまり、行李より別の金子十五兩を取り出して、馬方に與へ、「もし此の二百兩なくば、我が一命を失ふのみならず、親兄弟までも重き罪に至らん。されば、そこの高恩なか〳〵言葉のいひつくすべきに

熊澤蕃山　名は伯繼、京都の人、備前侯池田光政に事へて其政に任ず。元祿四年（約二三〇年前）歿。年七十三。

河原市　高島郡にあり。

榎木　滋賀郡にあり。

あらねども、先づ當座の御禮までに贈り奉る。」と、涙を流して悅ぶに、馬方大いに驚きし顏色にて、「そなたの金をそなたに取り納めたまふに、何の禮いふ事あるべき。」とて、手にだに取らず。いろ〳〵にいへども、さらに受けずして歸らんとする故、やむことを得ず、十兩とへらし、五兩となし、三兩となし、段々とへらして、つひには金二歩となし、「せめて是ばかりは我が心の悅びなれば、受け給ふべし。さなくては我が心もすみ申さず。今宵もいねがたし。」と、理を盡し詞を盡していふにぞ、「此の金を受け申す程ならば、二百兩をも留め置き申すべし。かくかへし申すからには、聊かにても謝禮を受くるは、我が心にあらず。さりとて餘儀なくのたまへば、さらば鳥目二百文をたまはるべし。是は今夜やすむべき所を是まで追ひかけ來れる賃金なり。是は我が取るべき錢なれば、申し請くべし。」といひて、二百文を受けて歸らんとす。

飛脚も感に堪へかね「さるにても、そこは、いかなる人にておはす。」と問ふに、「名ある者にあらず、又何一つ知れる者にあらず。只我が在所の近所に小川村といふ所あり。此の村に與右衞門といふ人おはして、夜ごとに講釋といふことあり。某も折ふし行きて聞き侍りしに、『親には孝をつくすべし。主人は大切にするものなり。人の物は取らぬものなり。無理非道は行ふべからず。』などいふ事、常々語り給ふにより、今日の金子も我が物にあらざれば、取るべき理なしと心得しまでの事なり。」といひて歸りぬ。

飛脚はそれより京へのぼり、いつもの宿に到り、さても此の度は辛き命生きのびて、おの〳〵方にも對面することなりぬ。」とて、有りし次第をくはしく語るに、折ふし其の家の裏に熊澤治郎八、田舍よりのぼり居て、學問修行最中の事なりしが、此の物語を聞きて、「其の人こそ誠の儒といふものなれ。」とて、其の翌日すぐに江州に到り、小

川村を尋ねて隨從を願はれしに、「人に教へ申すべきほどの學德なし。」とて、さらに隨從を許し給はず。熊澤ひたすらに願ひて、二日が間藤樹の門にたゝずみて歸らず。藤樹の老母、是を氣の毒がり、「よしや、先づ内へ入れ申せよ。」とありし故、辭みがたくて内へ入れ、つひに師弟の約をせられしよしなり。其の後藤樹を備前より招き給ひしに、「其の身は病身なり。」とて堅く辭し、門人熊澤といふものあり、御役にも立つべき者なり。」とて、熊澤を出されけり。

いづれも格別の事どもなり。長物語なれど、藤樹先生の事跡くはしく知らぬ人も多ければ、見聞き及ぶ所を書き付けぬ。江州に遊ぶ人は、必ず彼の講堂を見るべき事なり。（東遊記卷四）

求麻川（今は球磨川と書く。）那須山・椎葉山（共に日向にあり。）

四　求麻川

肥後の求麻川は九州第一の急流なり。源遠く那須・椎葉山・五箇

五箇邑　肥後國球磨郡。九州第一の僻境なりといふ。平家の殘黨の逃れたる所。

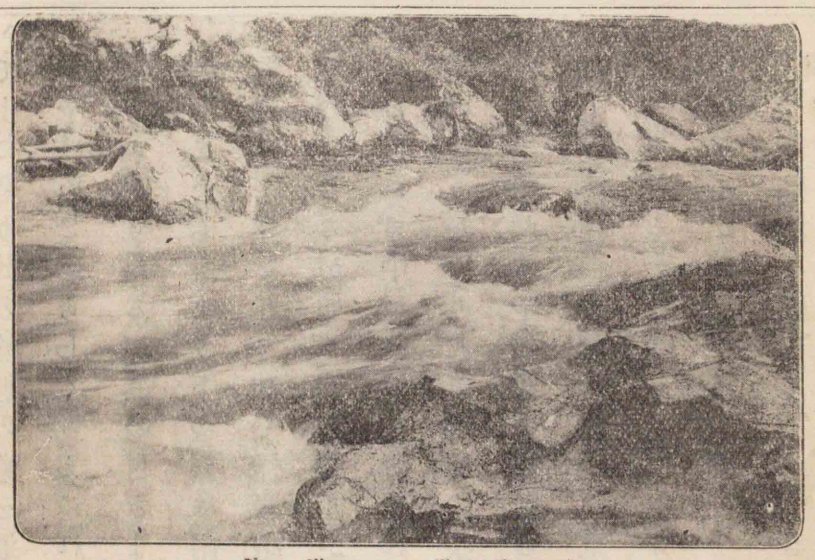
人吉　肥後國球磨郡の都邑。相良氏二萬二千石の舊城下。

八代　肥後八代郡の都邑。

邑邊より出でて、四十里ばかりも流れたり。殊に大河にて、求麻郡の眞中をつらぬき、人吉の城下を過ぎて八代に至り、肥後の海に入る。予が歸路には、相良の御舟にて此の急流を下りぬ。船はもとより輕し、人も纜かに予と僕と二人に船人三人、都合五人乘なれば、飛ぶが如く八代まで十六里の川を僅か二時に下り着きたり。

頃は三月の末にて、春水殊に多し。船に乘れば、送別の人々おびたゞしく打集りて、名殘惜しきこと言ふも更なり。纜を解けば、もとよりの急流にて、見送りの人々は霞の中に入りて、招く扇もはや見失ひぬ。

船はいと小さく細く作りて、首尾の舵を附けたり。これは眞逆さまに大岩に流れかゝりたるとき、あとばかりの舵にては、船の廻ること遲き故に、さきにも舵をつけたるなり。常に先の舵を第一に動かし居て、岩角を避け、思ふ方に船をめぐらす。又中程に楫を



球磨川の激流

持ちて一人立てり。これは船を前後左右に動かす爲なり。此の三人の船頭、しばらくも油斷せず船を操る。浪殊に逆卷く所にいたりては、船の兩方に高き板を立つ。浪の船中に入らざる樣にとてするなり。十六里の間に四五箇所は至つて艱嶮の所ありて、浪の高きこと山の如く、怒れる岩角、浪の間におびたゞしく峙ち出づ。かゝる所にては、領主などの通行の時は、瀨越しとて、其の前後四五町或は八九町ばかりも船を離れ

て山に登り、此の嶮悪の瀬を通り越して、又船に乗り給ふとなり。

予はいと珍らしく覺えぬれば、興に乘じて其の瀬をも船に乘りながら下りぬるが、其の目ざましきこと筆の及ぶべきにあらず。渡りといふ所より下つ方は、兩山嶮しく峙ちて、峰は頭の上に臨み、流れ殊に狹まりて細く、怪巖峨々として、屏風をたゝめるが如く、壁をつけたるが如く、龍の騰るが如く、獅子の踞るが如し。或は雜樹生ひ茂れる中に入るかとすれば、松杉森々たる岸に臨む。或は山吹の散りかゝりたる、躑躅の咲きそろひたる、山櫻の己が梢とあらはれ出でたる、千景萬色、眸をめぐらすにしたがひ、兩山たゞ走るが如し。李太白が「輕舟已過萬重山。」と詠ぜしはかゝる境にやとおもひ出でらる。程なく八代の井手といふ里に着きぬ。誠に舟中の快かりしこと今も忘れ難し。日向より求麻に入りしもかねて聞きつる急流を船にて下るべき爲なりけるが、日頃の望を遂げていと嬉し。

己が梢　詞花和歌集に「みやまの木のそのの梢とも見えざりし櫻は花にあらはれにけり」（題しらず、源頼政）

李太白　唐の大詩人。白帝城より揚子江を下り、江陵に至りし時の詩に「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還。兩岸猿聲啼不住、輕舟已過萬重山。」

求麻の地は、極深山の中にて廣大の平地、別世界をなし、仙境ともいふべし。他國に出で入る路は、日向の嘉久藤口と此の求麻川筋と二道のみなり。此の川の傍に山路あれども、絶嶮にて殊に細し。されば相良侯にも東都御參勤の時も、此の川を船にて下らるとなり。家中の面々も皆船なり。誠に數百里の海上を經て東武に出づることなれば、其の家族親友など此の川ばたに出でて見送りの時、殊にあはれなることなり。其の時に船の纜を解くや否や、陸より船の中の人に水をかくることなり。船の人々笠をへだてて水を防ぐ。此のまぎれに、急流のことなれば、數十町下り過ぎて、涕をそゝぐひまなく、はや見送りの人影を見失ふなり。予が出發の時も、その如くなりき。陸地の別れと異にして、物いひかはすひまもなく速かにてよけれど、又更に心ぼそくあはれなり。（西遊記卷三）

東武　江戸。

吹上　吹上といふ處は紀伊駿河武藏備前薩摩等にあり。

五　吹上の濱

諸國に吹上の濱といふは數多あり。海風荒く遠淺の濱に、白砂を吹上ぐる地を、いづかたにても吹上と名づくるなるべし。就中すぐれたるは薩州西南の濱の吹上なり。その海、もとより限なき大洋にて、風荒ければ、白砂をうづ高く吹上げ、又これを吹散らす故に、その砂の高低定らず。殊に濱長く、數十里を一目に望み、白砂一點の塵もなく、風景無雙なり。此の吹上の濱の蜑乙女のよめるとて、昔より彼の地に名高き和歌あり。

吹上の松は眞砂にうづもれて
老木ながらの小まつ原かな

三藐院殿　近衛信尹。近衛流書風の祖。關白氏の長者となり、慶長十九年（約三一〇年前）歿す。年五十。

坊の津　薩摩の西南隅にあり。昔は支那との貿易港なりき。

これは三藐院殿の坊の津へ左遷ましく〳〵て、しばらく滯留ありしとき、この和歌を聞し召して感ぜさせたまひしとぞ。又自ら詠みて蜑乙女なりと宣ひしともいひ傳ふ。余も例の出次第に、

秋かぜの眞砂が上にわたるなり
ゆふ日うすづく吹きあげの濱

と、口ずさみて過ぎつ。三藐院公の御假座は、わづか暫くの間と聞きしに、この公ましまし〻餘風にや、今に至り此の國には和歌を好む人も多く聞ゆ。

花にあかし紅葉にくらす折々は
住まばやとおもふ山ぞおほかる

と、詠みしは、近き頃曾山氏なる人のよみたる歌とぞ。余が如く諸國名勝の地に、西となく東となく遊ぶ身は、いつもこの歌思ひ出して、心留まる景地のみ多し。猶この外にも耳に留まる歌ども多く

聞きしかど、旅の日の事しげくて忘れぬ。誠に名公の餘風遠く遺れりと、その昔こそゆかしけれ。（西遊記續篇卷一）

常山紀談抄

常山紀談に就いて

常山紀談、二十五卷、湯淺常山の著。戰國時代から德川初期に至る凡そ百年間に於ける武人の言行を記したもので、その文平明にして剛健、よく古武士の意氣精神を傳へて面目躍如たらしむるものがある。これ本書が幾多の類書中にあつて、獨り群を拔いて世に行はれ、永く讀者を失はざる所以であらう。

常山、名は元禎、字は文祥、通稱は新兵衞、常山と號し、岡山藩士である。弱冠、江戸に出で、服部南郭に學んで文名大いに揚り、又孫吳の兵法と槍劍の術とを善くし、常に文武兩道を以て士人の要道となした。數〻藩の要職に就いたが、直言して憚る所なかつた爲に終に黜けられ、爾來門を杜ぢ、客を謝し、書を著はして自ら娛んだ。天明元年（約一五〇年前）歿す。年七十四。常山樓文集・常山樓筆餘等著書十數種ある。

太田持資　資清の子。剃髪して道灌と號す。

上杉定正　扇谷（アフギガヤツ）上杉氏第六代の主。山内上杉七代の主顯定と迹年戰を交へたり。

七重八重云々　後拾遺和歌集に「小倉の家に住みけり侍りける頃、雨の降りける日、蓑かれば、山吹の枝を折りてとらせて侍りけり。心もえでまかり過ぎて、又の日山吹の心もえざりしよしいひにおこせて侍りける返事にいはしけるは。中務卿兼明親王」として出づ。

一　太田持資歌道に志す事

太田左衞門大夫持資は、上杉定正の老臣なり。鷹狩に出でて雨に逢ひ、ある山家に入りて、蓑を借らんといふに、わかき女の、何とも物をばいはずして、山吹の花一枝折りて出しければ、「花を求むるにあらず。」とて怒りて歸りしに、これを聞きし人の、「それは、

七重八重花は咲けども山ぶきの
みの一つだになきぞ悲しき

といふ古歌の心なるべし。」といふ。持資驚きて、それより歌に志をよせけり。

定正、上總の廳南（ちゅうなん）に軍を出す時、山涯の海邊を通るに、山上より弩を射かけられんや、又潮滿ちたらんや、はかり難しとて危みけり。折節、夜半の事なり。持資「いざ、われ見來らん。」とて、馬を馳せ出し、や

廳南　上總國長生郡にあり。康正二年、武田信長（三河入道）こゝに築きて上杉氏に抗す。

そこひなき　古今集に素性法師の歌として出づ。

道灌と少女（長谷川雪旦筆）

がて歸りて、「潮は干たり。」といふ。「いかにして知りたるか。」と問ふに、

「遠くなり近く
なるみの濱千鳥
鳴く音に潮の
みちひをぞ知る

とよめる歌あり。千鳥の聲遠く聞えつ。」といひけり。又、いづれの時にや、軍をかへす時、これも夜の事なりしに、利根川を渡らんとするに、暗さは暗し、淺瀬を知らず。持資また、

「そこひなき淵やはさわぐ山川の
あさき瀬にこそあだ波はたて

こいふ歌あり。波音あらきところを渡せ。」といひて、事なくわたしけり。持資後に道灌と稱す。（卷之一）

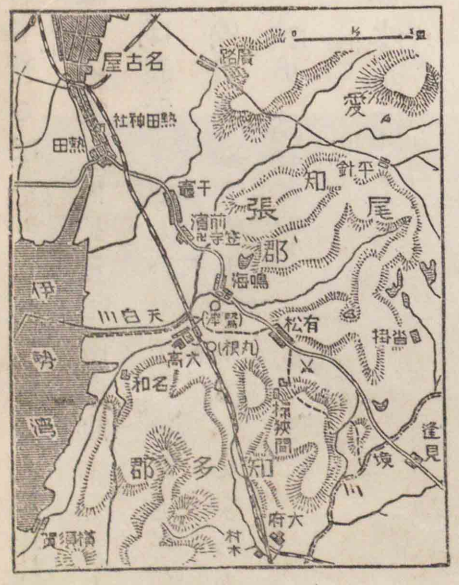
二　桶狹間合戰の事

永祿三年五月、今川義元、大軍をひきゐ、織田信長を討ち、鷲津、丸根を攻め落し、桶狹間に著陣す。信長は、もとより、鳴海に打つて出で、防戰せんとの志なり。老臣ども、「大敵なれば、清洲を守り給へ。」と諫むれども聞き入れず、酒宴して、猿樂に、羅生門の曲舞を舞はせられし時、敵既に攻め來ると告げ來る。信長少しも騷がず、「人間五十年、下天の內をくらぶれば、夢幻の如し。」といふ所を押し返しうたひて、忽ち法螺を吹き立てさせ、物の具して、主從僅かに六騎、步卒二百人許にて駈け出で、熱田の宮に詣で、願文を神殿に納めらるゝ中に、軍兵追ひつゞき來りけり。

今川義元　氏親の子。敗死せし時年四十二。
鷲津丸根　尾張國愛知郡。
桶狹間　同國知多郡。鳴海の南方約二里。
鳴海　尾張國愛知郡。
清洲　同國西春日井郡。當時信長の本城。
熱田の宮　今官幣大社。名古屋市熱田にあり。草薙劍を祀る。
源太夫の祠　熱田にあり、尾張國造乎止世命を祀るといふ。
笠寺　尾張國愛知郡。

源太夫の祠より東を見れば、鷲津、丸根攻め落されたりと覺えて、黑煙立ちのぼる。濱手は潮滿ちたれば、笠寺の東の道を一文字に進んで、砦々の身方に使をはしらせ、その兵を引き具し、中島の砦に至りて、「わが謀は、今川の大軍悉く本道へ繰り出し、旗本小勢ならん所へ、山陰より切つて懸り、忽ち勝負を決すべし。」と、大音聲にて下知せられしかば、士卒皆競ひ勇みけり。乃ち旗を絞らせ、山陰より、桶狹間に打ち向ふ。

義元は、駿州の先陣打ち勝つたりと喜び、酒もりしてありしに、折しも天俄にくもり、夕立うつすに似て、風雷はげしかりければ、信長の兵かゝり來る物音も



桶狹間附近

聞きわかず、不意の戰にあわてたるばかりなれば、水野太郎作清久、一番に首を取る。義元の綱代の輿を信長見て、敵の旗本疑なしとて、追ひたて〳〵戰はれしかば、義元も返し合せて戰はれしを、服部小平太槍をつけ、毛利新助その首をとりたりけり。左文字の太刀、松倉郷の刀を分捕にすといへり。（卷之二）

左文字　筑前の刀匠、正宗十哲の一人、左衞門三郎慶源。

松倉郷　越中松倉の刀匠、郷義弘、正宗の弟子。

安土城　近江國蒲生郡、天正四年織田信長築く。

左馬助秀俊　又光春に作る。光秀の父弟。

山崎　山城國乙訓郡。

粟津　近江國滋賀郡。

大津　同上。

堀久太郎秀政　美濃の人。秀吉に仕へて從四位下左衞門督たり。天正十八年歿す。

三　明智秀俊湖水を渡す事

光秀、信長を弑して、安土の城を攻めおとし、左馬助秀俊に守らせて、山崎に打ち向ひ、秀吉と戰ひて敗北せり。

秀俊安土を出でて、光秀を救はんと、京をさして進みしが、はや光秀討たれたりと聞えしかば、阪本の城に入らんと、粟津を北へ、大津をさして行く所に、秀吉の先陣堀久太郎秀政に行きあひけり。秀俊小勢なればうち破られぬ。本道は敵にふさがれつ。湖水に馬をうち入れおよがせければ、秀吉の軍兵ども、汀に並び居て、溺れんを有さまを見よ。」と笑ひあへり。秀俊は、白練に、雲龍を狩野永德にかかせたる羽織を著、二の谷といふ冑を著、大鹿毛と名づけたる馬に乘り、年久しく阪本に在りて、大津より唐崎までの遠淺はよく知りたれば、たやすく唐崎濱に乘りあげ、ひとつ松の下にて、馬には息あひの藥を飼ひ、追ひくる敵を見て居たりしが、又馬に乘り、阪本に入る時、十王堂の前にて馬よりおり、

狩野永德　狩野氏の五世。世に古永德と稱す。天正十八年歿す。

唐崎　近江國滋賀郡。近江八景の一。

唐崎夜雨（廣重筆）

手綱をもて堂に繫ぎ、矢立の硯とり出し、「明智左馬助、湖水をわたせし馬なり。」と札に書きて、手とりかみに結びつけ、阪本の城に入り、光秀の妻子を天守に入れ、安土より、光秀が奪ひとり來れる不動國行、二字國俊の刀、名物の器などを、唐織の肩衣に包み、天守より投げおろし、其の後女童を刺し殺し、火をかけて自害せり。

二の谷の冑に、羽織と黃金百兩添へて、阪本の西敎寺に送りけり。後に山中山城守長俊が孫、作右衞門友俊、冑をのぞみ乞ひて得たりしが、程經て、紀伊の士、宇佐美造酒助孝定が許に傳はりぬ。羽織は行方を知らず。馬は無雙の駿足にて、秀吉志津嶽の軍に此の馬に乘られしなり。（卷之五）

不動國行　來國行の作、刀身に不動の影あるよりいふ。
二字國俊　來國行の子。
西敎寺　天台宗興盛派の大本山。
志津嶽　近江國伊香郡餘呂の湖の西方。

四　竹中重治の事

竹中半兵衞重治は、美濃の菩提の城主なり、後に秀吉の軍奉行たり。謀略ある人なれども、うち見たる所は婦人の如く、軍に臨む時も、猛威あることなし。馬の皮にて包める甲を著て、木綿の羽織、一の谷と名づけたる冑の緒をしめ、靜まり返りて居けり。

竹中半兵衞　美濃の人。豐臣秀吉の謀臣。天正七年歿す。
菩提城　海津郡。

竹中重治

重治向ふ度毎に、士卒戰はずして既に勝ちたりと勇みあへり。

重治或時軍物語せしに、子の左京、いまだ幼かりしが、座を立ちければ、重治「軍は國の大事なり、何方へ行く。」と問ふ。「厠にゆく。」と答ふ。重治「此處に溺をたるゝとも、軍物語の大事の席を立つことやある」と怒られけり。（卷之六）

立花道雪　名は鑑連。筑前立花の城主。天正十二年歿す。

五　立花道雪行狀の事

立花道雪は、若かりし時、雷に震たれ、足痿え、歩行心に任せず、常に

大友家　大友氏は戰國の時最も盛にして豐前・豐後・肥後・筑後を領有せり。

手輿に乘れり。累代大友家に屬す。大友家衰へけれども、道雪心を變ぜず。武勇逞しき人にて、士卒を見ること、子を愛するが如し。戰に臨む時は、二尺七寸有りける刀と、種が島の鐵砲とを手輿に入れ、三尺計の棒に腕貫をして手に提げて乘られ、長き刀挿したる若き士百餘人、手輿の左右に引具し、軍始れば、手輿を此の士にかゝせ、棒を取りて手輿を叩き、えいとう聲をあげ、「此の輿を敵の眞中にかき入れよ。」とて、拍子取り、遲きときは輿の前後をたゝかれけるに、敵に北げたるよりも恥として、面もふらずかき入れければ、手輿の左右の士、三尺餘の刀を抽き連れて、一文字に切つてかゝりけるに、先陣の者ども、「すはや、例の音頭よ。」といひもあへず、われ先にと競ひかかり、いかなる堅陣をも切り崩さずといふ事なし。若し先陣追つ立てらるゝ時は、道雪大音揚げて、「我を敵の中へ舁き入れよ、命惜しくば其の後逃げよ。」と、眼を見出し下知せられしほどに、もり返して勝たざる事なし。斯かれば、道雪の士は、一日に幾度槍を合せたりといふ者多し。

又道雪常に、「士に弱き者はなきものなり、若し弱き者あらば、其の人の惡しきにあらで、其の大將の勵さざるの罪なり。吾が士はいふにや及ぶ、下部に至つても、度々功名なきはあらず。他の家にて後れたる士あらば、吾が方に來り仕へよ、取りかへて逸物にせん。吾が士の四月朔日左三兵衞は、若き時、初めて後れし事の有りしに、いつの頃よりか、血腥き事にあひて、次第に物に慣れ、今は五六人の剛の者と世にいはるゝぞかし。」とて、たま〳〵武功なき士のあれば、「明塞の有るは武功の事よ。弱からざるは我見定めたり。明日にも軍に出でんに、人にそゞろかされ、必ず拔懸して討死し給ふな。それは不忠なり、身を全うして道雪を見つぎ給はれ。各を打ち連れたればこそ、斯く年老いたる身の、敵の眞中に在りて痿みたる色

を見せざるぞ。」と、いと懇に睦まじくいひて酒酌みかはし、其の比はやりける武具取り出してあたへられけり。これに勵されて、重ねて、軍のあらん時、必ず人に後れじと勇みて、聊かも武者振のよく見ゆれば、呼び出して、「あれ人々見候へ。此の道雪が見し所に違ふべきにあらず。」とて、勝れたる剛の者の名を呼びて、「頼み候ふほどに、能く引き廻してよ。」といひ、又、「人々の心を合せらるゝこと、此の道雪は天の冥加に叶ひたることよ。」と勇ませ立て、もし若き士の、席上にて心得違ひたる事のある時は、客の前などに呼び出し、打ち笑ひ、「道雪が士、不束にこそあれ、されども、軍に臨みて、火花をちらし候槍は、此の人々こそ能くすれ。」とて、槍追つ取りたるまねして譽められしかば、人々感じて涙を流し、此の人の爲に命を捨てんとはげみけり。（卷之八）

六　關白鶴が岡參詣の事

鶴岡に詣で　天正十八年小田原征伐の際。

頼義父子　源頼義とその子義家。

蛭が小島　伊豆國田方郡。

蒲生氏郷　織田信長に仕へ後秀吉に屬す。文祿四年歿。年四十。

細川忠興　藤孝の子。正保四年歿す。

なき名ぞと　この歌、後撰集に出づ。詠者不詳。

秀吉、鎌倉の鶴が岡に詣で八幡宮の戸を開かせて、頼朝の像を見られしが、背中を打ち叩き、「微賤より出でて、日本を掌に握る事、我と御邊と二人なり。然れども、頼義父子、鎮守府將軍として、東國の者ども久しく親み多かりき。蛭が小島より兵を起されしに、關東の靡き從へるも謂なきにあらず。我は土民の中より、斯く日本を思の儘にすれば、功尚高しといふべし。」といはれけり。（卷之九）

七　蒲生氏郷鐙を細川忠興に贈らるゝ事

氏郷のもとに、佐々木が鐙といへる名高き器あり。細川忠興いと懇に、「われに賜はれ。」と乞はれしかば、亘理某、「これは世久しく傳はる物にて候。似たる鐙を贈り給へ。」といひければ、氏郷

「なき名ぞと人にはいひてやみなまし
こゝろの問はばいかが答へん」

といふ歌の恥かしさよ。」とて、かの鐙を贈られけり。

蒲生はもと江州の士にて、佐々木の臣なり。氏郷、伊勢の松坂十二萬石を領せしが、後會津八十萬石を賜はりけり。その領内安達郡に川あり、向うに黒塚あり、安達は氏郷の領地なりしに、黒塚は伊達政宗の領地なりとて爭のありしが、氏郷「正」兼盛の歌に、

みちのくの安達が原の黒塚に
鬼こもれりといふはまことか

と詠めることあり、いかに。」と申されしに、政宗これを聞きて、「黒塚は安達が原に屬したること分明なり。」とて、遂に爭をやめてけり。（卷之九）

伊達政宗　仙臺城主、小田原の役秀吉と會見、關ケ原役後家康に屬す。寛永十三年歿、年七十。

みちのくの　拾遺集に出づ。

八　曾呂利新左衞門屢頓智の事

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ。」と問ひけるに、對ふるやう、「臣が姓名は卽ち曾呂利新左衞門と申し候。」太閤「さては奇なる姓もあるものかな。」して其の曾呂利と申す姓には何ぞいはれにてもありつるものか。」と問はせけるに、又對ふるやう、「聊か謂れこれあり候、別にあらず、臣の拵へたる鞘堅くして、そろりと入り、敢てつかへず。是を以て曾呂利と申し候。」太閤「こは奇なり。又折節來らるべし。」

堺　和泉國堺浦。

他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申ししな。」對へて曰く、「曾呂利々々々、新左衞門々々々々々。」太閤怪しみて其の重言を尋ねけるに、新左衞門の對ふるやう、「殿下先に臣の姓名を問ひ、今又重ねて問ひ給ふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て對へ候なり。」

新左衞門或時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の香ひを嗅がせられたし。」とありければ、太閤はいぶかしく思ひ、「こやつ又何をかなすらん。」と疑ひしが、「何はともあれ、宜し、汝がよきに嗅がれよ。」と許され

しかば、諸大名の御機嫌伺に出づる時を窺ひ、太閤の耳根に口寄せて何やら言ふ體を爲す。居合せたる面々心中密かに驚き「かやつ何を言ふらん。もしや我を讒言するにはあらざるか。かやつは頗る殿下の寵愛する所なれば、かやつが言ふこと御用ひあらんも亦測られず。」と憂ひ、各、わが邸に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて、密かに曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集りぬ。

さて太閤の御前に出で、謝して言へるやう、「殿下一日の御耳を拜借し、其のかうばしき香ひを嗅ぎたる功能によりて、金銀財寶山の如くあつまり來りて、殆ど坐するの餘席これなく候。これ全く殿下御耳の功能なり。」とありければ、太閤もまた呆然として驚きけりとなん。

又或日の事なりしが、新左衞門太閤の機嫌を取り、頗るその功ありける程に、太閤の申しけるは、「何なりと汝の望むものを取らせん。」とありけるに、新左衞門の言へるやう、「臣敢て大いなる望もこれなく候。唯紙袋二つほど米を賜はりたし。」太閤、「そはいと〳〵易きことなり。餘り寡欲の至ならずや。」と仰せありけるに、新左衞門「これにて澤山なり。」と申して退出なしゝが、やがて二つの紙袋を張り拔き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で、「前日約定の米これに賜はりたし。」とて米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれにはあきれて、しばし言葉もなかりけりとぞ。

又或日の事なりしが、嘗て太閤數多金銀の蟹を鑄造らせ、これを庭の泉水或は其の近邊に放ちて娯樂となしけるが、程經て見厭きたりとて、近習の者に、「何ぞ一用を言ひ出づる者にはこれを與へん。」と申されけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣はこれを紙押になさん。」と言ひ、或は「臣は金の茶釜の蓋もなければ、せめては之を以て其の蓋の

畠山高政　河内國を領し高屋城に居る。

取手になさん。」と言ひ、或は何と言ひ、かと言ひて、各一個づつ賜はりしうち、新左衛門の乞ふやう、「臣は人類の角力も既に見厭きしことなれば、此の蟹を集へて角力を致させんと存ずるなり。」と言ひければ、太閤、「角力とありては、五個や十個にては其の興薄かるべし。悉く持ち行くべし。」と、殘れる蟹を皆新左衛門に與へけるとなん。其の頓才實に驚くべし。（卷之九）

九　三木牛之介鍬形の詩歌の事

三木牛之介は畠山高政に仕へて剛の者なり。五尺ばかりの鍬形打ちたる冑を著て、「運在天見敵無退」、また

人はたゞさし出でぬこそよかりけれ
いくさにだにもさきがけをせば

と詠める歌を鍬形に書きたりしが、天文十一年正月河内の合戰に、

三好政勝入道宗三　政勝は政長の誤ならん。細川氏に仕へ越前守と稱し、剃髪して宗三と號す。

舍利寺　攝津國東成郡生野村にある寺。

景勝　長尾政景の子。謙信に養はる。

鍬形の冑

一番槍を合せ、敵の大將を打取りたり。天文十六年七月二十三日、三好政勝入道宗三と舍利寺の軍に討死しけり。のち此の歌のことを秀吉に物語する人ありければ、秀吉、「歌の趣意よろしからず。吾ならば、

人はたゞさし出づるこそよかりけれ
いくさのときもさきがけをして

と詠むべきものを、」といはれけり。（卷之十一）

一〇　直江兼續が事

越後の士大將直江山城守兼續は、朝日將軍義仲の乳母子樋口次郎兼光が末孫なり。謙信に仕へて、景勝に至る。景勝奥州にて百萬石を賜はりし時、米澤三十萬石を直江に與へらる。陪臣の中第

一の大祿なり。丈高く、容儀骨柄雙びなく、辯舌明かに、殊更大膽なる人なり。且文藝にも暗からず、五臣注の文選は、此の人板行せさせたりとなり。詩をも作りて、

春雁似吾吾似雁。　洛陽城裏背花歸。

などといふ句も世に聞えたり。

伏見の城にて諸大名いくらも竝み居たる中に、伊達政宗、懷中より金錢取出して、人々に見せられしに、其の頃金錢の始まりし比にて、珍しとてもてはやさる。直江が末座に在りしを、「これ見られよ。」とありし時、直江扇の上に金錢を置きて打返し、女童の羽根つくやうにして觀しかば、政宗、「いや苦しうも候はず、手に取られよ。」と言ひも終らぬに、直江「謙信の時より先陣の下知して塵取り候手に、かゝる賤しき物とれば汚れ候故、扇に載せて候。」とて、政宗のかたに投げ戻しけり。（卷之十二）

五臣注の文選　文選は六十卷梁の昭明太子蕭統の編。周秦より梁までの詩文を集めたるもの。それを、呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の五臣が註したるなり。

金錢　黃金の貨幣。

一一　加藤清正治亂を論ぜられし事

關が原の戰の後、東照宮「石田が亂は雨降りて地固るといふに同じ、これより靜謐ならん。」と仰ありしに、諸大名皆祝し奉りたる處に、加藤清正「仰の如く、惡逆の輩誅せられ、泰平ならんこと必然に候。然れども、天下の治亂は、天の陰晴にたとへ候ひなんには、晴れ渡りたる青天と見るも、俄かに雲の出で來て、雨うつすが如き事もあるものに候へば、測りがたきは人の心にて候。」と申されければ、淺からず御感ありきとなり。（卷之十五）

一二　細川幽齋古歌を書きて忠興を諫められし事

細川忠興諸事嚴正に過ぐと、父の幽齋に告ぐる者ありければ、忠興の長臣を呼びて、古歌二首書きて與へらる。

細川幽齋　名は藤孝、剃髮して幽齋と號す。初め足利氏に仕へ、後、信長に仕ふ。和歌に長ず。慶長十五年歿。

「逢阪の關のあらしの寒けれど
　ゆくへ知らねばわびつゝぞぬる

この歌の意を察せよ。

まこも草つのぐみわたる澤邊には
　つながぬ駒もはなれざりけり

この歌の意をよく思慮せられよと忠興に言へ。」と教訓せられけり。

關のあらしの歌は、古今集よみ人しらず、まこも草の歌は詞花集俊惠法師の歌なり。（卷之十八）

俊惠法師　源俊頼の子

一三　小櫃與五右衞門諷諫の事

會津中將保科正之は、台德院殿の第九男にておはししが、殊に豪氣あり。近習の人に向ひて、人々の樂しむ所を尋ねられしに、小櫃與五右衞門といへる者、「臣が樂しむ事二つ有り。其の一つは、家貧

保科正之　會津藩の祖。正光の養嗣。寛文十二年歿す。

台德院殿　二代將軍秀忠。

くして奢といふ事を知らず、天より命ぜられし貧を樂しむ」よしを申す。其の一つを問はるゝに、「これは憚る所の候。」とて言はず。しひて問はれしかば、謹んで申しけるやう、「大名に生れざるを、天の冥加と存じ、樂しむ所なり。」と答へければ、その子細を問はるゝに、「大名は、天性賢くおはし候うても、臣下これを馬鹿にとりなし候。祿少き身は、其の師や朋友、惡しき事を戒め諫め候故に、其の身を省みて、馬鹿にならず候へども、大名はさはなく候。臣たる者、とかく忤ひては、身の爲よからじと存じて、其の主のよき事あれば、山の如くにほめ申し、いろ〳〵の惡しき習はしを付け候ほどに、いつとなく、恣になりもて行き、そ

保科正之

れよりは一言の諫をも申しがたく候。いかに聰明にても、學問なく、教といふ事を知らず、善事を辨へ給ふべきやうなき故、馬鹿になりはて候は、口惜しき事に候はずや。臣大名に生れざるを樂と存じ候は、此の子細に候。」と申せば、中將つくづくと聞し召して、「よくも言ひたるかな。尤も至極せり。今より馬鹿にならざる思慮すべきよ。」とて、賞美のあまり、卽ち二百石の祿を增し與へられけり。それより山崎嘉右衞門を尊信し、學問を嗜まれ、後神公と諡せられしは、此の中將の御事なり。（卷之二十四）

山崎嘉右衞門　名は嘉。闇齋と號す。京都の儒者。元和二年歿す。

一四　武邊は律義者にありといふ事

律義なる者ならでは武邊はなき由、昔より云ひ傳へたり。加藤主計頭淸正、剛の者をほしく思ひ、一生の間、目利に心を盡し、人相までも稽古致されしかども、其の術を得られず。唯「律義者に武邊者多し。」といはれしとなり。又加藤左馬助嘉明も申されしには、「氣さきのけなげなる者は、人の目を驚かすほどの働きをすといへども、踏みつめたる武功は、律義なる者にあり。たとへば賴みもなく、旦那の威衰へて、人々二心を持つ中に、獨り義を守りて心がはりなき强みは、律義者ならではなき事なり。詔ひ者は、たとひ萬一に一旦の武邊ありても、曾て賴みにならず。旦那の出頭を心掛け、知行を取りて、人に笑はるゝをも、恥とは己も知れども、其の恥を恥かしとも思はぬ者は、旦那を殺しても、身の爲のよき事ならばなすべきなり。僞と貪とは品變れども、落著は同じ事なり。」と言はれしとなり。新太郎樣にも、常に、「詔ひ者に知行を與へ置くは、盜賊を抱へ置くと同じ事なり。」と仰せられしよし、智者の詞、割符を合せたるがごとし。

加藤嘉明　秀吉の臣、征韓の役の水軍の將。寛永八年歿。

新太郎樣　岡山藩主池田光政のこと。

國語讀本

卷三終

第二學年用　齋藤哲男

昭和四年三月廿五日
文部省檢定濟
中學校國語科用

大正十三年十二月十六日印刷
大正十三年十二月十九日發行
大正十四年二月廿一日訂正再版印刷
大正十四年二月廿四日訂正再版發行
昭和三年十一月一日改訂印刷
昭和三年十一月四日改訂發行
昭和四年三月十七日改訂再版發行
昭和五年二月十八日改訂六版發行

昭和改訂版　國語讀本

卷數	定價	昭和五年度臨時定價
一、二、三	各金四十七錢	金七十七錢
五、六、八	各金四十六錢	金七十五錢
七、九、十	各金四十五錢	金七十三錢
四	金四十四錢	金七十二錢

編者　上田萬年
同　榮田猛猪
同　鹽野新次郎
印刷兼發行者　株式會社啓成社
右代表者　布津純一
印刷所　東京市芝區芝浦町二丁目三番地　日進舍

發行所　東京市京橋區加賀町一番地　株式會社啓成社
電話銀座(57)二四九四番
振替東京一二〇五五番

上田
不許複製

山陽中學校
齋藤哲男